

渡辺崋山『寓画堂日記』『崋山先生謾録』に関する一考察

——思想形成過程を探る基礎作業として——

矢森 小映子

はじめに

渡辺崋山は多様な側面をもつ人物である。

崋山は名を定静、通称を登という。寛政五年（一七九三）、江戸麹町半蔵門外の藩邸内の長屋に生れ、定府の三河田原藩士として、若い頃より鷹見星臯・佐藤一斎らに儒学を学んだ。天保三年（一八三二）より田原藩年寄役（家老）として藩政に携わる一方、洋学も積極的に研究して『慎機論』などの政治論説を著している。さらに絵師としても活躍し、代表作に「鷹見泉石像」がある。天保一〇年、蛮社の獄で弾圧され、田原に蟄居となるが天保一二年に自

殺した。

これらの諸側面を一人の人物としてどう理解するか、美術史・洋学史・政治史など様々な分野から膨大な研究が重ねられてきた。その多くにおいて、崋山の中にあるこれらの側面は、家老であることや儒学を「克服すべきもの・限界」とし、洋学の知識や絵師としての精神をその反対物として位置づけた上で、その矛盾・対立を指摘することが主要なテーマとされてきた^①。この傾向の背景には、明治以来の一元的な顕彰史観に対する反動、さらに洋学の性格を封建制との関係においてとらえる洋学論争の影響があると考えられる。

だが崋山の中の諸要素を矛盾・対立の枠組みで説明する

この手法では、一九世紀という時代はその矛盾に追い込んだ「限界」の時代にしかならず、崋山は其中で開明性ゆえに苦しんだ特殊な個人として位置づけられてしまう。近年別所興一氏はこの「矛盾・対立」論を批判し、崋山の学問観・世界観、蘭学の新知識の根本に儒学があつたことを指摘しているが、蘭学がどのように儒学的世界観にとり込まれていったのか、その過程は明らかにされていない。⁽²⁾今後崋山研究を深めていくにあたっては、崋山がこれらの諸要素をどのように併せ持つようになり、それらが崋山の中でどのように位置づいていたのかを、史料に基づいて明らかにしていく必要があるだろう。

そのような思想形成過程を探る手がかりとして、筆者が注目したのが、日記・紀行文・手控・書簡などの崋山の基礎史料である。本稿では、このうち一部の書簡を除いて最も早い時期に書かれた、『寓画堂日記』（文化十二・二三歳）、『崋山先生謾録』（文化十三・二四歳）という二つの日記をとりあげ、思想形成過程の一端を考察してみたい。

従来の研究史においては、崋山の思想は『慎機論』『西洋事情書』などの政治論説や「退役願書之稿」など公的に書かれた文書が優先され、情報源や思想基盤に立ち返った、

これら基礎史料に基づく研究が不足してきた。

たとえば『寓画堂日記』『崋山先生謾録』も、森銑三氏、佐藤昌介氏など多くの崋山研究者により、若き日の崋山を知る史料として引用されてきた。⁽³⁾しかしその利用は、藩務・画道修業（内職）・学問に励み、自らを厳しく律する崋山の青春時代の描写として、ごく一部を抜粋・紹介したものがほとんどである。洋学研究を始める以前の日記であるため、洋学史の立場からはあまり重視されてこなかったが、菅沼貞三氏・日比野秀男氏ら美術史家からは、その学画過程の分かる史料として注目されている。⁽⁴⁾また別所興一氏は、これら基礎史料にみられる博物学的関心などに着目し、「旺盛で幅広い好奇心の持ち主」⁽⁵⁾という新たな崋山像をうちだした。

筆者が目指したのは崋山の思想形成過程の解明であり、具体的には、これらの基礎史料を年代を追って丹念に読み込み、学問過程や読書歴、交友関係、発言記録などから、その関心の方向性や根底にある意識を分析した。

その作業過程で作成したのが、今回掲載した【日記記事表】【引用・抜粋・聞書き記事】である。簡単に見方を説明しておきたい。まず、史料は『渡辺崋山集』⁽⁶⁾収録のも

のを用いた。書誌の詳細は同書をご参照いただきたい。

【日記記事表】は各日記記事を「書物・詩歌・学問等」・「人物」・「画作等」・「藩務」・「備考・その他」に分類してまとめたものである。「書物・詩歌・学問等」の項目には貸借・抜粹・自作等の記事も含めた。空欄は不明のものであり、今後も特定作業が必要である。なお、日付のみ記載されている日、あるいは表の項目に該当する記事がない日については、表に月日のみを記し、記事そのものが全く抜けている日と区別させた。【引用・抜粹・聞書き記事】は、崋山が特に関心をもつて日記に書きとめた記事として、別紙にまとめたものである。基本的には書物・歌・詩・俳句等を引用・抜粹したものであるが、聞書きや自身の発言記録なども含めた。

この二つの日記が含む情報は膨大であり、またその内容も幅広い。本来ならその一つ一つを日を追って論じたいところだが、紙面の関係もあり、特に筆者が興味深いと感じた四点をとりあげて考察したい。

1 儒学学習過程

まず気がつくのは、画作・交際関係記事の多さと、儒学関係記事の少なさである。ここでは特に崋山と儒学の関係を考えたい。

天保九年に崋山が記した「退役願書之稿」には、十二歳の時「儒者相成可申と決心」^⑦して鷹見星阜に入門したとあり、生活苦で儒者は断念したものの、後に佐藤一斎・松崎慊堂らに師事し、若い頃より儒学を学んだとするのが通説である。

確かに佐藤一斎や竹村梅斎など儒学者との交流記事は多く見られる。しかし「書物・詩歌・学問等」の欄をみると、儒学書はほとんどみられず、教義についての抜粹・引用もない。他の絵画や書物の情報量と比べ、極めて少ないと言える。ただし『崋山先生謄録』九月二三日条には、「一事に思ひたゝん人八、其道のをきてゆるがせにすべからずとぞ。四九孟子、五十詩経。」とあり、四と九の日に孟子、五と十の日に詩経を読むことを課している。これを実践したことを日記に記しているのは、九月二十九日の「夜孟子」という記事のみであるが、少なくとも当時の崋山にとって

の「一事」が孟子・詩経であったことはわかる。

ここから二つの可能性が考えられる。第一に、儒学学習に関する記録は他の手控などに記していた可能性、第二に、特に書き留めるべきもの、心を動かすものがその学習過程から得られなかった可能性である。

もちろん崋山が儒学を学んでいたことは間違いないだろう。渡辺家は代々家老に就くべき家柄であるし、天保二年には田原藩江戸屋敷学問所の稽古惣掛り・文学指南にもなっている。崋山に儒学の素養があったことは確かである。

しかしその学習過程は研究史においてほとんど明らかにされておらず、今回の日記の分析からも知ることはできなかった。崋山がどのように儒学を学び、その過程でどのような影響を受け、そして受容していったのか、崋山の儒学思想を論じるには、今後探っていく必要があるだろう。

書物の引用・抜粋・感想は、崋山がこれらを読み、心にとめて書き残したものである。感動のためか、備忘か、その動機は不明だが、いずれにせよ崋山の心を動かしたものであったと考えられる。その中に、『光国公家訓』『徒然草』など、いわゆる儒学の教義書以外の書物が多く含まれている点は、非常に興味深い。たとえば前掲の『崋山先

生謾録』九月二三日条「一事に思ひたゝん人ハ、其道のをきてゆるがせにすべからずとぞ。四九孟子、五十詩経。」

という文言は、九月一日の「行すゑのどかに思ひてさしあたりたることにのみつかはれ、今日ハ此事をなさんと思へど、のがれぬ事の出来なんと兼而のあらましみなたがひ行めり。必一事に思ひたゝん人ハ第一に交をたちて人のあざけりをも顧ず、第二に他の事の破るゝ共思ひ立ぬる方に心をやりて、日をおしむべきなりとぞ、ならびの岡の法師ハもふされたり。されバ一升の水をはかれるに、一合よりもれ一勺おろかなれば、大なる損ありとぞ。一日の間もかくごとく、一年のうちも又しかり。況や一事を思ひたゝん人の一生□□□」という文章を受けていると思われるが、この典拠は、「ならびの岡の法師」すなわち兼好法師の『徒然草』である。孟子・詩経学習の動機付けとして『徒然草』が引用されている点は、崋山の思想形成に関わった書物を考える上で非常に重要な点だろう。このように、儒学・洋学・絵画といった従来の枠組みでは見落とされてしまいう諸要素を位置づけ、その関係を明らかにしていくためには、これらの読書歴に沿って一書ずつ検討していく作業が必要である。今後の課題としたい。

2 詩歌・俳諧

和歌・狂歌・俳句・漢詩などもまた、そのような崋山の諸要素の一つであろう。崋山は日常においてこれらを自作しており、日記には自作・他作も含めて書きとめられている。佐藤一斎や竹村梅斎らと漢詩をよみ、山口萊石らと俳句をよむなど、当時の交流の中で、漢詩・俳句が重要なツールであったことがうかがえる。『崋山先生謾録』によれば、重陽に八蔵君（十三代藩主）の御前で俳句を読んでおり、藩士としても必要な素養であったと考えられる。

また、面白いのが同日記の二月三十日・四月十六日にみられる書画番付騒動の噂とそれを読み込んだ狂詩である。書画番付騒動については揖斐高氏の研究^⑧に詳しいが、文化十二年に出回った書画番付の位付けをめぐっておこった騒動をいう。この番付に対する不満から、番付仕掛人探しの急先鋒となったのが大田錦城で、弾劾文「大窪天民に与ふる書」は有名である。騒動そのものは板木の破棄によって鎮静化するが、江戸文人界を揺るがすスキャンダルとなった。番付の出版に直接関わったのは秦星池・佐藤晋斎・

山本緑陰・依田竹谷、資金の提供は大窪詩佛と菊池五山とされている。この番付には崋山も載っており、その動向に関心をもっていたことがうかがえる。この騒動の中心人物を巧みに織り込んで揶揄した太田南畝の狂詩は、揖斐氏によつて紹介されているが、ここに引用された狂詩も当時の騒動の様子を知る上で非常に面白い史料である。

3 聞書き記事

聞書きの多さは、崋山の日記の面白さの一つである。その内容は、偶然知った漢字・名前の覚書から人物の噂話、金粉・胡粉の製法・用法や薬草・鉱石の産地・効能まで幅広い。また『崋山先生謾録』十一月二三日条には、阿波の鳴門で「十五間ノアハビ」（なまずか）がとれ、その「御届」があったと記されている。当時の噂話を書きとめたのだろうか。

崋山をとりまくネットワークを通じてもたらされる情報がどのようなものであったのか、そして崋山は其中でどのような情報に興味をもったのか。聞書きは、崋山の関心の方向性や時代状況を知る重要な手がかりとなるだろう。

4 藩務記事

最後に、崋山の藩務記事について、まだ試論の段階ではあるが考察しておきたい。

天保三年には家老として藩政の中心となっていく崋山だが、この頃はまだ要職にはなく、藩務記事は「直」「直殿」「直宿」など、他の画作・交際記事などに比べて非常に簡潔である。崋山自身は前掲「退役願書之稿」において、「八歳より十五歳迄は日勤之御奉公仕、十六歳より三十二歳迄は隔日にて、日勤同様繁多に相勤候」⁽⁹⁾とその繁忙を語っているが、直中にも画作・書見を行っている記事がしばしば見られる。ほかに供頭として藩主随員の任務もある。

その中で面白いのが、『萬画堂日記』二月十一日条の「於君辺、入俗談」という記事である。ここから想起されるのは、日夜君側に侍し、御咄の御相手をする「御伽衆」⁽¹⁰⁾である。御伽衆はもともと戦国時代の陣中武辺咄などから発展したものとされており、またその語るところは「よく其の主を益し、旧家の秘事、名将の隠徳、みな語り伝え

られ、多くの史話を後世に伝え」る隠れた働きをなしたとされている⁽¹¹⁾。したがって、本来は実戦・国政、世事に通じた老功の武士か、あるいは学者など特殊な知識の所有者が就くものであったが、寛永年間以降には戦国時代風な咄の需要が乏しくなり、將軍家においても古老の御伽衆は消え、若殿相手の少年の御伽衆というものが幕末まで存続していったとされている。ただし家光以降の御伽衆の実態は、將軍家以外ほとんど明らかにされていない。

崋山は寛政十二年・文化三年に世子の御伽役を命じられているが、文化四年に若殿御伽役を辞め、近習役となっている。文化十一年には納戸役となり、十二年には刀番兼務・供頭として勤めているから、当時役職としての御伽役にあったわけではない。

しかし夜君辺で咄をするというこの行為は、戦国時代から続く御伽のあり方が当時も残っていたことを示しているのではないか。ただしその内容を崋山自身が「俗談」としている点は面白い。「俗談」は崋山の日記中しばしばみられる文言だが、「悖志入俗談」「誤入俗談」など、否定的な意味合いをもって用いられることが多い。君主の見聞を高め、「よく其の主を益」すとされていた御伽は、この時

「俗談」とみなされるものへと変化していったということだろう。また同書一月十四日条には「侍君辺、欠功」という記事もある。君辺に待すという行為が、当時の崋山にとってどのような意味・役割をもっていたのか。他の日記・書簡なども併せて今後検討していきたい。

おわりに

崋山の日記は政治論説などに比べて研究が少ないが、實際関係・読書歴・画作記事など、日常の記録が細かに記載されており、その利用価値は非常に大きいといえる。もちろん日記記事が日常の全てではなく、また長期的なものではないという欠点もあるが、崋山の思想形成過程の一端を示していることは確かであり、十九世紀の時代状況を知る上でも有効な史料であることは間違いないだろう。

さて、今回の日記において最も詳細かつ豊富な記事は絵画と交際に関するものであり、これらが当時崋山の生活の中心となっていたと考えられる。しかし、次の日記『全楽堂日録』（文政十三年から天保四年まで）にみられる十五年後の崋山は、確実に変化を遂げている。どのような変化

であり、何によるものだったのか。そして変わらなかったものは何だろうか。それは次稿で明らかにしていきたい。

【注】

- (1) 吉沢忠『渡辺崋山』（東京大学出版会、一九五六年）、佐藤昌介「渡辺崋山の洋学研究と蛮社の獄」（東北大学文学会『文化』第一八巻第一号、一九五四年）など。
- (2) 別所興一『渡辺崋山―郷国と世界へのまなざし―』（あるむ、二〇〇四年）、同「渡辺崋山のアジア認識と西洋認識」（片桐一男編『日蘭交渉史 その人・物・情報』、思文閣出版、二〇〇二年）など。
- (3) 森銑三『渡邊崋山』（創元社、一九四一年）、佐藤昌介『渡辺崋山』（吉川弘文館、一九八六年）、小澤耕一『崋山渡辺登』（崋山会、改訂第八版、一九九四年）など。
- (4) 菅沼貞三『崋山の研究』（座右宝刊行会、一九四七年）、日比野秀男『渡辺崋山―秘められた海防思想―』（ベリカン社、一九九四年）など。
- (5) 別所前掲『渡辺崋山―郷国と世界へのまなざし―』、五頁。
- (6) 小澤耕一・芳賀登監修『渡辺崋山集』全七冊（日本図書センター、一九九九年）。このうち『寓画堂日記』『崋

山先生謾録』は第一巻収録。

(7) 「退役願書之稿」(佐藤昌介ほか校註『日本思想大系五

五 渡辺崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本

左内』、岩波書店、一九七一年) 九七頁。

(8) 揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム―『五山堂詩話』
の世界―』(角川書店、二〇〇一年)。

(9) 前掲「退役願書之稿」、九六頁。

(10) 御伽衆に関する先行研究としては、桑田忠親『大名と
御伽衆 増補新版』(有精堂出版、一九六九年)、若尾政
希『「太平記読み」の時代―近世政治思想史の構想―』

(平凡社、一九九九年)を参照。

(11) 桑田同右書、一一六頁。

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
文化12							
	元旦	夜課書見			成万事吉兆図・摸南 郷太平雀画幅・写立 木八歌図		
	1月2日	番書見・見風俗 文選	森川許六撰。芭 蕉門人の俳文を 集め、筆者列伝 を添えた書。宝 永3刊。		成古木八歌図	夜宿直	
	1月3日	菅笠謡論不成・ 夜課詩二首成	不明	長崎右膳。江戸後期の書家。号 は東原、神田紺屋町住。	描扇面・描灯彩画 太平雀図・摸成・磐 (摹砂引)・彩灯画・ 児童雑画本摸成	午後直殿	
	1月4日		半水来儀	播磨明石藩士林儀助。号は半 水、谷文晁門の画家。			
	1月5日	画徴録	上弓山楼	谷文晁のアトリエ。下谷二長 町。	彩灯・彩灯画・彩灯	午前直殿・宿直	停行入劇談
	1月6日		至松源寺、拜立 君墓先師墓。 翠岳公ヨリ小模 来り	田原藩江代藩主三宅康友、田原 藩儒應見星卓。			
	1月7日		留守望遠来儀 小野五良来儀、 画帖五葉ヲ端 ス。	滝沢馬琴の子。金子金陵の門 人。華山の画友。	磐・彩画 唐紙裏白製・成一鹿 図雑画台五枚・彩灯	午後公用	
	1月8日	苗留別志拔萃			唐紙白製	直殿・宿直	
			留守中一江来儀	この藩の近くに文晁門人で華山 の画友の菊池文海(幕府槍組同 心、通称喜十郎)の居宅があっ た。			
	1月9日	馬琴方江皿々 物語返却	馬琴作の読本 『皿々物語』5 冊、文化12刊。 葛飾北斎挿絵 『陶徴録』(前 掲)	馬琴方江(同 左)	写合威化鶴図・彩灯 画		
	1月10日	画徴録		滝沢馬琴。戯作者。	描合威化鶴図・彩灯 画		

【日記事表(1)】『萬面堂日記』記事

※『萬面堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	1月11日	南留別志抜萃 (前掲)	文鳳初会上写山楼 留守中堀留ヨリ 手簡来ル	谷文晁。華山の絵の師。 江戸飯田町堀留に住む旗本山口勝之助(中興御番衆、2500石)か。華山の友人。はじめ金子金陵に師事し、のち華山門下に在士屋、浮世絵師師斎北馬の門人。	描合威化鶴図・彩灯画 彩灯画	午前直殿・宿直	
	1月12日		遊馬来儀 塞仕條来	素十。太白堂関係の俳人か。	唐紙懸手製・聖像・製図・彩灯 製聖像・描聖像・彩灯一枚	直殿・夜直、侍君辺、欠功	停止續行
	1月13日						
	1月14日	『佩文斎詠物詩選』。清の康熙帝勅撰、古初から明代までの詩集。					
	1月15日	観風文斎咏物詩			描聖像・彩灯画	午後公用	停止入俗談
	1月16日		訪士屋遊馬、返函参儀掛物。猪八並二清左衛門ヲ訪	土屋遊馬(前掲)	描合歡図・彩灯・彩灯画	公用、夜近火、直殿夜直	年始礼多行
			至一江、喜朝、津田、吹林、石山宅 上翠岳君堂、借口口巻一巻、函本三冊、又一冊。	津田：播磨明石藩士津田勘太郎景彦。華山の雅友。祝寿堂と号す。和文をよくし武芸に長じた。著書『山崎物語』。			
	1月17日		訪馬琴、金陵 上山口君堂	馬琴：前掲。金陵：金子金陵。谷文晁門の画家。華山が青少年期に師事。山口勝之助(前掲)			

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
			訪田口	桂甫：姓菊池、通称七兵衛。華山の画友。呉平：二科錦川。画家。江戸横山町で酒屋を営む。加藤：加藤玄亀、別名玄亀。号は曳尾庵。江戸の町医、俳諧宗匠。文化13～文政2、田原藩のお抱え医師。「我衣」作者。吉田探信。幕府御用絵師狩野探信守道。朝廷より式部法眼に叙せられる。			
			至吉田				
			訪田中、秀宝院、丹羽喜平、岡助頼一掃焉	田原藩士上田岡助。	描合歌図・彩灯画	直殿	
	1月18日						
	1月19日	見書	春時吉田、駒谷初筈引杖	蘭方医吉田長淑。	彩灯画		
	1月20日	春曉詩成	山口君ヨリ廿五日正室可仕旨手簡来	山口勝之助(前掲)	彩灯画・製図・夕日灯画一葉・圓灯・著輞十枚	直殿・此夜直宿	
	1月21日						
	1月22日						
	1月23日						
	1月24日						
	1月25日		上山口吾堂	山口勝之助(前掲)			
	1月26日						
	1月27日						
	1月28日						
	1月29日				白製帳、合歌図著色。 合歌図著・耀三帳・襷自製・合歌図著色・彩灯画 摸合歌図、南薰画・燈・彩灯画数多揃取	昼前直殿・夜直宿	
	1月30日						
	2月1日		訪喜平子		彩灯画・午前彩灯画・午後彩灯画・摸□□	直殿	悖志数多

【日記記事表(1)】『萬面堂日記』記事

※『萬面堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	書物・詩歌・学問等	人物	画作等	藩務	備考・その他
	2月2日			摸南藩庭画幅・摸口・簪・摸雜画本	直殿	停盃数多・又復停行・又伴行、半時入俗談。
	2月3日		上写山楼、摸南	摸南藩・摸口	夜直・公用	
	2月4日		谷文晁 (前掲)	摸南藩庭図・製図	直殿・公用	
	2月5日			半摸啓書記八仙人図・製図	直殿・直宿	誤入俗談
	2月6日		訪須賀川、借写、真二十枚余、南岳画并画譜、築込来儀、山水図・三枚唐、富貴の人、牡丹山水三枚返上。	製図	直宿	
	2月7日		奔庵来儀、朱二、夕握拳	製図・摸南藩図	乗馬・倍徒	
	2月8日		上山口君様	描龜図	午後直宿	
	2月9日		山口勝之助 (前掲)	終日弄筆	直殿・直宿	
	2月10日		周助頼画屏風、因初奈、上桂甫、菊池桂甫 (前掲) 堂。	屏風		
	2月11日		土屋より画頼来	風屏ヲ一掃・描口屏風・摸写終日・摸口	直殿、夜直、於君辺、入俗談。	
	2月12日		終日登写山楼、摸踊踊	摸口		
	2月13日		谷文晁 (前掲)	摸口・成岬画一枚・摸口	直殿、夜直	誤俗談
	2月14日		米花初会			
	2月15日		上奥禮亭			
	2月16日		翠岳君宛会上堂	描簾簾図	直宿	
	2月16日		訪昌平画亭	配り掛物三枚、黒描	午後直殿	
	2月17日		訪扇面亭			
	2月17日		吳平方え使出す	摸南藩庭		

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・字 間等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	2月18日		半次来儀	林篋助(前掲)	摸南蕓、墨而製図		
			光信、文水来儀	光信：後藤光信、文晁門人で華山の画友。・文水：文晁門人で華山の画友。			
	2月19日		晁澄、竹谷来儀	竹谷：依田竹谷、幕臣。文晁門人。通称甚三郎、字子長。江戸下谷御徒町住。	摸南蕓	直殿・公用・夜直	
			上太白堂	五世山口萊石。江戸の俳諧師。通称藤屋勘左衛門。	描扇面書紙		
	2月20日		金陵方より手簡来	金子金陵(前掲)	摸南蕓	午後直宿	半善、半不善
			訪周助	田原藩士上田周助(前掲)			
	2月21日		終日上写山樓、摸南蕓、借文永藏百花図一	谷文晁(前掲)			
	2月22日				摸南蕓、墨而製図	直殿	
	2月23日		鹿岡幅返山口	山口勝之助(前掲)		倍(陪カ) 從君	
			描扇介(助カ) 扇画	田原藩士上田周助(前掲)			
	2月24日		林谷会、至百川樓	細川梁、林谷、林道人などと号す。讀岐出身で江戸下谷三味線堀住。篆刻の名手で、華山の印も刻す。書画もよくした。			
	2月25日				摩志樓下絵不成	終日直殿	
	2月26日		桂甫手翰来ル	菊池桂甫(前掲)	摸扇図・模下絵・摸風屏	午後直殿	
	2月27日		終日、上写山樓、摸南蕓而成	谷文晁(前掲)			夜宿獨発動
			桂甫馮象仙画幅来ル	菊池桂甫(前掲)			
	2月28日		星池画会、上万八樓	姓は秦、名は其馨。書家で、特に楷書・行書に長じた。(万八樓は、阿国柳橋の貸席)		直殿・夜直宿	
	2月29日		鯉々橋頼風屏描	菊池文海(前掲)		午後直殿・同上夜	

【日記事表(1)】『萬面堂日記』記事

※『萬面堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・字問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	2月30日		描閣氏綱画并杉原氏頼問		掃塗屋圍		夜依病廢眠
	3月1日		問駒谷・疋種湯液八帖落筆・間談	吉田長叙 (前掲)	摸山水縮図・摸宿図・一日功僅三葉	直殿・直宿	
	3月3日		訪芳庵		牡丹下絵著色八分一・摸宿図		
	3月3日		留守中太白来儀・南鄙侯より頼折本来	山口乘石 (前掲)	牡丹下絵僅一筆	午前回勤・入俗談	夜放情
	3月4日						
	3月5日		上山口君之章、見九馬図、奇絶物也	山口勝之助 (前掲)		午前直・午後直	
	3月6日		摸牡丹下絵並南鄙侯頼小圖条・訪駒谷・葉八服落筆	南部利用 (前掲)		午後直	夜種和発動
	3月7日	披奇人伝萃	『近世奇人伝』伴高隠著。江戸時代の徳行家・歌人・漢詩人・隠者などの特異な行状を記述。			直・倍 (陪力) 従試馬・夜直・公用	
	3月8日	午後直中見奇人伝 (1)	『近世奇人伝』 (前掲)		摸馬汲三図・摸山水図三枚	午後直	夜又入俗談
	3月9日		上写山楼・計勳彦・屋山	谷文晁 (前掲) 勳彦：益田勳彦か。篆刻家。屋山：稻毛屋山。篆刻家。			
	3月10日		上求心斎				
	3月11日	暮春詩成	逆馬会上三河楼	土屋遊馬 (前掲)		直殿・公用・午後公用	
					六仙図摸成	午後公用	

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	滞務	備考・その他
	3月12日		與駒谷采葉、至王子辺	吉田長淑 (前掲)			
	3月13日		山口ヨリ来書	山口勝之助 (前掲)		倍 (陪カ) 従君 駕、至飛鳥山	
	3月14日		百慶頼山水半幅 描寫			午後公用	
	3月15日		依山、雲毫来儀	依山：書家松本半兵衛。名は藤、字は君相、号は風月楼、山子とも。雲毫：松田雲章、天保期の筆名な南画家。		終日住宿	
			自桂直書翰来	菊池往甫 (前掲)			
			送彦左衛門別	華山の母方の祖父河村彦左衛門。		直殿	
	3月16日		上須加山楼	須賀川出身の染物業異国屋八木半助。亜欧堂田善の経営した店舗。			
	3月17日				摸山水図、摸山水二枚		
	3月18日		江西画会上楼、 揮毫	華山の画友。			
	3月19日					直殿、午到松 願寺・公用	運筆習
	3月20日		南部公卿頼画条 出来	南部利用 (前掲)	摸山水大幅成り		
	3月21日		指押谷公頼銀襖 着。	押谷左内。旗本二千石。中興御番。			見宋百絶
	3月22日						序志
	3月23日		皇城集会上楼	谷文晁系の画家。	山水冊漸摸半枚、午 後俗用紛々、不下一 筆	直殿・公用・日 暮公用	
	3月24日		上山口君楼、見 白描圓幅	山口勝之助 (前掲)	描銀襖・摸山水小冊 二枚半		
	3月25日		柴沢来儀	柴沢 (前掲)	直中、摸山水冊五 枚・牡丹着色	道・夕方公用・ 夜公用	

【日記事表(1)】『萬面堂日記』記事

※『萬面堂日記』(『藤辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	書物・詩歌・学問等	人物	画作等	藩務	備考・その他
	3月26日			牡丹着色・摸山水冊 十枚・着色・宿図山水 冊摸成		
	3月27日			終日牡丹銀襖ヲ描、 未成		
	3月28日		訪駒谷	摸蔀藤大幅山水 蔀藤大幅山水摸成	直殿・宿直 午後直殿	※牛肚髻：牛 の内臓図。・ 鉤肋：あばら 骨。
	3月29日			佇志、牛肚髻真写、 僅鉤肋而耳※		
	4月1日	見書並見光国 公家訓、慇不 止。		牛肚髻着色、終日枝 花図銀襖着色		
	4月2日	貸面徴録(同 右)・筆記隨筆 掲)	『面徴録』(前 掲)	摸山水	終日直・公用 粉々・夜公用	
	4月3日	落花詩成	錦川来儀、貸面 徴録、南嶺摸本 二葉、是鹿鶴二 図	描銀襖・摸山水図 描山水図	午後直・公用 公用	
	4月4日	落花詩又成		山水図摸成	夜公用	
	4月6日		問紫沢不逢	銀襖着色・製図・製 図	退直・午後直殿	
	4月7日		訪遊馬	描銀襖・製図	公用	
	4月8日					非華山、華山 隠。
	4月9日					
	4月10日					
	4月11日				直中公用	
	4月12日					非華山隠

【日記記事表(1)】『萬画堂日記』記事

※『萬画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	勤務	備考・その他
	4月13日		訪平水	林儀助(前掲)	模叢書	直殿	
	4月14日				模致文堂叢書	公用	夜停志
	4月15日		上左内丑楼	神谷左内(前掲)か。市野：田原			
	4月16日			江本：江本市夢か。市野：田原			
	4月17日		訪江本、市野	藩士市野泉助。納戸役兼馬役、23段。または市野迷庵(市野屋三右衛門)か。	模致文堂叢書一枚	直殿・公用・夜直	習字・停志
	4月18日	仙仏奇踪六巻(同右)	描宮崎氏頼三画 甲乙会 於桂甫、仙仏奇踪六巻借 上写山楼、夏孫俊画幅又南蘋三描貞治頼画	絵事甲乙会。文化11、華山が興した同好の士の会合。 菊池桂甫(前掲) 谷文晁(前掲)		直宿	
	4月19日						
	4月20日					直殿	夜停志
	4月21日				模頼順(頼か)画、雨箱西来	午後直	
	4月22日		描貞二頼画			直・公用	
	4月23日		描貞二頼画			直中公用	夜停志入俗
	4月24日	請成	貞二頼画模成		模面岳画又描雨箱画又模菱川画・製図		
	4月25日		訪閑林	母は岡田、目白に住む与力、面を清水曲河に師事し、花鳥画をよくした。			
	4月26日		借文呬様面客邸楼		模頼順(頼か)備一筆・模菱川・製図	直宿・直宿	
	4月27日				製図・製図	終日公用	夜停志入俗 是王侯朝(江戸城に登城する公卿)。
	4月28日				模菱川画・製図		
	4月29日						
	4月30日						
	5月1日						
	5月2日						

【日記記事表(1)】『寓面堂日記』記事

※『寓面堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	5月3日		詠麴谷 上写山楼、摸南嶺	吉田長淑(前掲) 谷文晁(前掲)			
	5月4日		訪駿橋 訪半水	菊池文海(前掲) 林儀助(前掲)			下馬え罷起 (越か)王侯 の朝を見・至 広尾野、采艸 (漢草採取)
	5月5日				至天現寺、摸林景並 永真書記古画二幅	直・直宿	
	5月6日		終日上写山楼、 摸南嶺画	谷文晁(前掲)			
	5月7日		終日与太白堂主 人、遊荒菴崎	山口萊石(前掲)		終日直殿	
	5月8日				楠荒菴真崎景神庵・ 手白礬紙・夜課僅一 筆		
	5月9日				摸菱川画、並手製礬 紙・又摸菱川、扇子 二本、製図一枚成		
	5月10日						
	5月11日	披萃五雜俎 書。天・地・人・ 物・事の五部門か ら成る隨筆。16 巻。1619刊。	訪錦川	二科錦川(前掲)		直	
	5月12日	五雜俎披萃 作誦文	山口君堂二上	山口勝之助(前掲)	摸菱川図・製図	公用	
		作誦諸文章成	雄喬方え使差 出、輪会相託シ □□				

【日記記事表(1)】『萬画堂日記』記事

※『萬画堂日記』(『渡辺崋山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	5月13日	此日聞和歌二草。(中略)又狂歌真顔なるよし。(2)	鹿津部真顔(1753~1829)。狂歌師。小説家。本名北川嘉兵衛、狂歌堂、四方真顔と号す。戯作者としては恋川好町と呼ばれた。				
	5月14日	五雜俎抜萃	『五雜俎』(前掲)		横菱川面巻並雀真写		
	5月15日		自河村公光琳画幅借	旗本か。	摸写四枚		
	5月16日	五雜俎抜萃	『五雜俎』(前掲)	上写山楼、摸南嶺画馬図			
	5月17日						
	5月18日		上雄喬楼、揮毫数枚			午前公用	
	5月19日	五雜俎抜萃	『五雜俎』(前掲)	奉訪石川君以病辞	摸栗田口画		
	5月20日		訪平水又景彦談笑	林儀助(前掲)・津田景彦(前掲)か。			
	5月21日	見五雜俎	同上		摸栗田口流渡舟図	午前直	
	5月22日		訪吉田駒谷終日上写山楼、摸南嶺図	吉田長淑(前掲)	摸呉合鼎荘図		
	5月23日			谷文晁(前掲)	摸呉合鼎荘図・摸面巻	直	
	5月24日				足兼崎記行装描、午後酒色、眼疾		
	5月25日						
	5月26日						
	5月27日						
	5月28日		訪貞二				
	5月29日		松台庵会依上座、席上揮毫	渡辺玄対の別号。文晁の師匠で南北折衷派。麻布谷町住。			
			訪文一荷(病か)	谷文晁の女婿。通称文一郎。号は痴翁。江戸葉研堀の医師利光寛造の子で、画技は妙手だが病弱だった。			

【日記記事表(1)】『萬面堂日記』記事

※『萬面堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	6月1日		訪武清、画本ヲ借	喜多武清。江戸八丁堀の町人。谷文晁の門人で華山の画友。書画の鑑識にも通じていた。	眼裁成		至大手、見俵ノ朝
	6月2日				横菱川図六枚、白描而耳	午後直	見刈客
	6月3日		訪文晁、画出来	谷文晁 (前掲)			
	6月4日		訪半水、笑談	林儀助 (前掲)			
	6月5日						
	6月6日						
	6月7日						
		五輝組坂卒成 ル	宇橋頼山水成		清林避暑図成		
			訪文晁	谷文晁 (前掲)			
			訪竹谷不逢	依田竹谷 (前掲)			
6月8日			問月釣不逢	岡田道正。通称東輔。伊勢の画僧。谷口月窓の門人、雪舟派。文政11年シニールト事件に連坐して自刃。			
			訪東原笑談	長橋石膳 (前掲)	横菱川図巻・大和物語、吉住物語借来・大和画製図。	直	
			半水方より手翰来ル、摸本二枚貸ス。	林儀助 (前掲)			
6月9日		文晁此歌を記して話(3)	(同左) 文晁				
6月10日			訪近野氏	田原藩士市野泉助・市野迷庵 (前掲) か。	製吉住物語之図		
6月11日			与半水、山遊行	半水：林儀助 (前掲)	製図		
6月12日			大岳回状光信へ達ス	大岳：尾張藩士・画家。姓は浅尾、通称栄 (英) 助。光信：後藤光信 (前掲)	午前直中製図	午前直	
6月13日							
6月14日			武清、大和画台セ上堂	喜多武清 (前掲)			
6月15日			上山口碧堂	山口勝之助 (前掲)		直	

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・字 問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	6月16日		松貞ノ楼(二卷) 揮毫。 並米貞亨二枚ヲ 借		摸光琳画幅	直	
	6月17日			林儀助 (前掲)			御対客日に より例の官務の ため諸侯の朝 を見る。
	6月18日				摸光琳画	直、公用粉々	
	6月19日		金陵来リ 董烈君来	金子金陵 (前掲) 重九如の次男。父に学び、花鳥 画をよくした。姓は山崎、南 田、槐雲堂とも号した。	摸光琳画幅		
	6月20日		上写山藤、午後 摸□□ 竹谷米、粉本数 枚貸	谷文晁 (前掲)			
	6月21日		上甘南亭、□□ 借	依田竹谷 (前掲)			
	6月22日		是齋米 上皇城後		摸菱川画卷	午前直	
	6月23日			皇城 (前掲)	摸山水		
	6月24日						
	6月25日					庚神之遷坐ニ 付、神酒頂戴 二出仕。	午後依病廃日 課
	6月26日	病間見書中 【二】有適意 者。慕最集 (4)	太田道灌の家集 といわれる。				終日因病廃日 課
	6月27日						
	6月28日						因前廃日課
	6月29日		江西頼画ヲ描	江西 (前掲)	描令威化鶴図	直・申刻直	因前廃日課
	7月1日						
	7月2日		描松窓頼画 画江西頼画 江西頼画成	江西 (前掲) 江西 (前掲)			因前廃日課
	7月3日		米花頼画 山口頼画	小山米華 (前掲) か。 山口勝之助 (前掲)			
	7月4日						

【日記事表(1)】『萬面堂日記』記事

※『萬面堂日記』(渡辺華山集 第一巻)所収より

年	月 日	書物・詩歌・字 問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	7月5日				板下ヲ描ク 製図・摸菱川又價製 図	直	因荷筆硯
	7月6日				描菱川図・摸画	午後直・夜直	
	7月7日				摸八仙歌図・描太和 画	午後直	生怠氣
	7月8日					直	
	7月9日				描八仙歌	午後直・公用	
	7月10日						
	7月11日		訪金陵 素什 上甘南亭	金陵・金子金陵 (前掲) 素什: 素十 (前掲)	描吉住物語図	直	仏参
	7月12日		因俗用、自飯橋 至虎門	菊池文海 (前掲) か、單なる地 名か。		午後直	
	7月13日						
	7月15日		描山口君預画	山口勝之助 (前掲)	描神画三葉・製□□	終日直	
	7月16日					午後直	夜対窓望月
	7月17日						
	7月18日		上松台樓揮毫	渡辺玄好 (前掲)		午後直・公用 初々	
			至飯橋	菊池文海 (前掲)	□□着色		
	7月19日		賀村松太夫参着 上堂	田原藩家老村松六郎左衛門定 省。国元田原から江戸藩邸に来 着。			
			訪吉田、田中、 芝寮、大島蓮	吉田：吉田探信 (前掲)・大島 藩：交代寄合衆大島兵庫 (4500 石、鳥森住) の別邸か。			
	7月20日	調面徴録					
	7月21日						
	7月22日		半木来儀	林儀助 (前掲)	病中作眼鏡		因前薩万事
	7月23日				病中作眼鏡		因前薩万事
	7月24日		慈笑院様御大病 三付無事	田原藩山代藩主三宅康友夫人美 濃。この日逝去。		午後直	
	7月27日					直	
	7月28日				画春画		
	7月29日				画□□□	直	
	8月1日				描□□・夜製図	直	
	8月2日					終日公用	

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』『猿辺華山集 第一巻』所収より

年	月日	事物・詩歌・学問等	人物		画作等	潜務	備考・その他
	8月3日		黙然院殿御出棺 御供相勤	三宅康友夫人美濃 (前掲)		直	
	8月4日					直	
	8月5日					直	
	8月6日						
	8月7日		訪後藤理右衛門、文承	後藤：後藤光信 (前掲) か。文承：一橋家家臣、山本十次郎。文尾門の画家。		直	
	8月8日				画□□		日暮上劇場
	8月9日					直	
	8月10日					午後直	
	8月11日					直	
	8月12日		至松源寺、拝黙 笑院殿尊靈	三宅康友夫人美濃 (前掲)。 山口菜石 (前掲)	臨摹画鑑(漢の張勝著『桂陽先賢画纂』5巻のことか)		
	8月13日		上写山楼 上太白堂	谷文晁 (前掲) 山口菜石 (前掲)	臨摹画鑑・描住古物 語	直	
	8月14日		□直方より志村 隠住ぬしをもちて 機面をとりにお こせられたり。 即遣入。		描住古物語 (マヅ)		
			星城ぬしより正 見三助どのやまて ひあやうしとて 手翰来る。笑談 待志	星城 (前掲)・			
	8月16日	詩二首成			写画鑑・描住古物語・ 写画鑑	午前直・直宿	見候当朝。 (諸侯の江戸・ 城参城は、1 日と15日と23 日が定例日)
	8月16日						

【日記記事表(1)】『萬画堂日記』記事

※『萬画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』)所収)より

年	月日	書物・詩歌・字問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	8月17日		訪星城、佐藤、川村	星城(前掲)	摸菱山		
	8月18日				写画臺	終日直	
	8月19日	随筆を記	星城、琴簾、半水方へ使出す。	星城(前掲)・琴簾：滝沢琴嶺(前掲)・半水：林儀助(前掲)	摸菱川・写画臺	直、公用・夜直	
	8月20日		上半水楼	林儀助(同上)	写画臺・描菱川図	直、公用	
	8月21日	著俳文章			菱川図一筆而止・写画臺	午後公用	
	8月22日		水斎来儀。松平上総介家来直記。舍弟也。埋右衛門方に集。後藤光信(前掲)か。	松平上総介：旗本松平斉政			
	8月23日	看書	光信来儀、貸幕本四枚。	後藤光信(前掲)。滝沢琴嶺(前掲)の別号。(父馬)	隙子自製・摸画臺	直、々中公用・夜直、公用	見当朝
	8月24日		奈伯来、額画約諾。	琴の使いか)	写画臺		
	8月25日		製馬琴頼額画岬	滝沢馬琴(前掲)	描額画一筆・摸画臺(※谷文晁編集の『本朝画纂』)	直・夜直	
	8月26日		至飯台、訪金殿、々々廿七日出立之事。	金子金陵(前掲)			
	8月26日		馬琴頼三絵。訪出座老不幸。	滝沢馬琴(前掲)	摸画臺・摸画臺		
	8月27日		描馬琴頼面并半幅三枚	滝沢馬琴(前掲)		夜直宿	
	8月28日						
	8月28日						
	8月30日						
	9月1日						
	9月2日		許写山楼(右記事にも記載有り)	谷文晁(前掲)	此日見小仙牧童讀書圖又包山陸治芙蓉圖、皆響絶、写山楼云、至今初知小仙。写山悪、予信而不疑。宝倉所収。林麿本印。		

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』『渡辺華山集 第一巻』所収より

年	月日	書物・詩歌・字 問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	9月3日		上山口君樓 自山口君、侍法 師摸写卷物花屋 長夫一箱、芙蓉 画僮共。 自光信方手翰、 大和物語一冊貸 す。	山口勝之助 (前掲) 山口勝之助 (前掲)			
	9月4日					午後直	
	9月5日		訪田畑、見張松 書二物又来伯人 渠秋等書 訪曲河、見蘭画 三枚、皆奇絶物 也。		梁山泊画冊 描芙蓉之画幅	直	見当朝
	9月6日			姓は清水、名は純、字は子寛。 幕臣の画家輩九如門人。金陵と 相弟子。花鳥・山水をよくし た。			
	9月7日						
	9月8日		訪谷工、玄対、 芝山	玄対：渡辺玄対 (前掲)・芝 山：白川芝山か。			夜不善
	9月9日				摸芙蓉画幅 写梁山泊人物・摸陸 包山画・直中、摸梁 山泊人物	直・午後回動 午後直	
	9月10日				直中摸水許 (詩カ) 伝図・描陸目	直	
	9月11日		訪皇城 訪土屋基、見粉 本	皇城 (前掲) 土屋遊馬 (前掲)	製図		
	9月12日		訪上田氏 訪半水談笑、 林儀助 (前掲)	田原藩士上田周助 (前掲) 林儀助 (前掲)			
	11月18日	点検画徴録 掲	甲乙会製図	絵事甲乙会 (前掲)		従君賜、夜直	自戌半刻至亥 間入俗談、談 也。
	11月19日		上山口公堂、借 麥川画巻 訪又見笑談	山口相模守直温。旗本3000石。 牛込逢坂住。 谷又見 (前掲)	磐梁山泊水許伝三葉		因煤払

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(渡辺華山集 第一巻)所収より

年	月日	書物・詩歌・字問等	人物	画作等	藩務	備考・その他
	11月20日		朝日上窓、浄几、上私果了、真田俊望) 錦雞横幅着色	幕水譜半枚・水譜伝	午後直、公用	
	11月21日		前村松、入俗談、前半水、信田謙、又坂粉本、自神谷公画帳揮毫出来	幕水譜伝、錦雞着色	從君駕、到上増寺(マ)	因宿病、生念氣、行不善
	11月22日		描甲乙念赤壁図	繪事甲乙念(前掲)	直・夜直	
	11月23日			描赤壁図・描赤壁図	從君駕、至赤羽橋、青山午後直	夜伴志份用
	11月24日		自探信守道宅、前觀谷、敬梅門	吉田探信(前掲)		
	11月25日			吉田長祇(前掲)		
	11月26日					
	11月27日					
	11月28日					
	11月29日					
	12月1日					
	12月2日					
	12月3日					
	12月4日		訪文庫書物二借、柳沢侯画、訪吉田、菱翁動功有をもてとて八十石に任せらる。依然終日無事。	山本十次郎(前掲)、大和郡山15万石藩柳沢保泰、吉田探信(前掲)		
	12月5日			岸山父渡辺定通。		
	12月6日					
	12月7日		柳沢侯画着色、柳沢公画、柳沢公画、柳沢公画着色	柳沢保泰(前掲)、柳沢保泰(前掲)、柳沢保泰(前掲)	口着色幕以百疋半、余購藍瑛摹幅、弄筆	直・直
	12月8日	見書	柳沢公画着色、訪半水図三借	柳沢保泰(前掲)、林義助(前掲)	又着色・又着色	御鷹雁御祝儀上堂

【日記記事表(1)】『寓画堂日記』記事

※『寓画堂日記』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物	田原藩士斎藤式古衛門	画作等	潜務	備考・その他
	12月9日		訪斎藤入俗談 山口公より懸幅返却 豊呂来ル	山口直温 (前掲)			
	12月10日	讀画徴 『画徴録』(前掲)			成雞図 着色・三童子成略画。依乗興、倣小仙図、成大幅。南	夜直	
	12月11日	讀画徴 『画徴録』(前掲)			鶏図着色・直中横南	直	
	12月12日		豊呂来ル		終日着色・夜同上		
	12月13日				南嶺模一筆	直中模弘	
	12月14日		訪武清	喜多武清 (前掲)	南嶺模一筆	午後直	
	12月15日						
	12月16日						
	12月17日						
	12月18日		山口君、石川公の樓	山口：山口勝之助 (前掲)		從君堀	
	12月19日				模南嶺・南幕	直・午後從君堀、芝口回動	
	12月20日		文晁へ使出入、返書来。	谷文晁 (前掲)	南幕・直幕	午後直中公用	
	12月21日						
	12月22日						
	12月23日						
	12月24日						
	12月25日	読書 午前直中、読書	光信来、南嶺模成、文晁方へ遣入。 自文晁、授卵一箱紙十束	後藤光信 (前掲) 谷文晁 (前掲)	模南嶺・模南嶺 夜藤光琳三枚又梅津口口	從君堀 直・夜直 午後直	因宿懶、動至五鼓退食
	12月26日		訪芝嶽、訪婦翁家	谷文晁 (前掲)			
	12月27日		河村家 (前掲)				
	12月28日	読書	河村彦左衛門 (前掲)		錦鶏着色	從事朝退出・夜直	

【日記記事表(1)】『萬画堂日記』記事

※『萬画堂日記』『渡辺華山集 第一巻』所収より

年	月日	書物・詩歌・字 問等		人物		画作等	藩務	備考・その他
	12月29日	読画徴	『画徴録』(前掲)	夜祖父送左衛門 君病おもしろとて 手筒来。罷倒い ふ斗りなく母君 を護とひ奉る。 早や事されたの り。真に九十を 云くして世を 去り玉ふはせん かたなけれど、思 ひをさせ不奉、ひ 官奉る事さえたえ なる事、残心云 斗なく帰戌刻。二 入。	河村彦左衛門(前掲)		直	
	晦日							遺核奉送宗願 寺・夜宿頼光 助

【「萬画堂日記」中引用・抜粹・聞書き記事】

(1) 三月八日

午後直中、見奇人伝。卷中僧涌蓮が歌二浮木法師が二尊院の坊をかりてすめるが、火をあやまちて焼し時、かかるとき常の心のうごかぬを

終りみだれぬためしにはせよ

想二常に何事によらず末の事は前の行にあり、又矢部の正子が宮仕へに出る時とて、

行末の身のさちあらん折々も世の常なきを思ひ忘るな
又題しらずとて、

あすもまた朝とく起てつとめばや窓にうれしき有明の月

(2) 五月十三日

此日聞和歌二章。

なにごとも見ぬになれたる身なれども

富士とし聞けば涙こぼるゝ

又狂歌真顔なるよし。

朝なく富士にかゝれるしら雲は

漢土でやきもちやく煙なり

(3) 六月九日

文艸此歌を記して話。

すかし見ればひるかとぞ見る武さしのゝ

これはくさきを出る月かげ

梓弓矢はぎの橋をいでみやれとほるどころか二百八間

又鎌倉の右大臣の御歌とて

ものゝふの矢なみつくろふこての上に

あられたばしる小野の笹原

又

などてかくはかれの足の重きや

首は自由にふりかえれども

又彦間の歌とて送別。

たちどまり君が聞かに足引の

山ほとゝぎ〔す〕一声もかな

(4) 六月二十六日

終日因病廢日課。病間見書中〔二〕有適意者。慕景集、これは道灌が自かきあつめし藻塩艸有り。其中にこの歌をのせて詞書に、

康正元年の冬、藤沢の役にかたきも味方も入まじり、三日をかさねていどみあらそふ事になりぬ。されども味方の武威つよくして、かたき北条憲定ぬしついに自腹して、余兵

をのがしゝ空しうなり。あるはあだにあたりて、かたみに死するも待る時、藤沢のかたへの松原のむれにてたゝかふおのこあるに、味かたは中村治部少輔藤原重頼とて、京家の人の世にしづみて、屋形に扶持せられて侍りしになん。

敵の男は栗毛なる駒に乗りて、二つ引きやうにのぼり龍の紋付たるさしものなりけり。遠目ながらよろひの毛もいかめしうぞ見えける。しばしたゝかふて槍をあはせしに、めの前に敵の男つきとめられ、やがて中村手づから首を取て我陣に來りてかうくとなん語りけるに、いまだ壮年にもたらぬおのこの色しろうして、たけたかゝるべきこゝちしたり。鬢のあたりたゝなすたきしめつゝ、あはれもいやまし、あだながらにくからぬおもかげなり。中村重頼この心ばえのやさしきに、歌ひとつものして手向にとすゝめ侍りければ、その首にむかひて、

かゝるときさこそ命のおしからめ

かねてなきみと思ひしらずば

重頼かえし

なきみとはたれもしれどももろともに

今はおよぶことおしぞおもふ

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	事物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
文化 13	正月						
	1月2日						
	1月3日					御供本浄寺御 弁当	
	1月4日						
	1月5日						
	1月6日						
	1月7日						
	1月8日						
	1月9日		為年始祝儀訪文 鳳、緑陰発会、 松源寺、田中、 武清、秀室院、 吉田探信	文麗：谷文晁(前掲)・緑陰： 山本緑陰。江戸後期の漢学者。 山本北山の子。・松源寺：田原 藩主三宅家の菩提寺。・武清： 喜多武清(前掲)・吉田探信 (前掲)			上野御靈 屋：上野東 叡山寛永 寺。
	1月10日		金陵発会	金子金陵(前掲)		直、上野御靈 屋御拜礼御供	
	1月11日					直	
	1月12日		文麗発会、終日 上野山楼	谷文晁(前掲)	直中彩燈画・金鶏着 色	直	
	1月13日						
	1月14日				彩燈画・夜課同 色	直	
	1月15日		訪建村、竹村、 秋、米彦、楓中 園、谷、佐、山、 彦、上野、平、上 意、寺、下、頭、海、 龍、定、識	竹村：竹村梅齋。三河奉母藩の儒 者。通称梅庵。詩文をよくし、絵 も描いた。文政三年同藩の家老津 村佐左衛門の専横を痛恨し、津村 を殺害して自刃。・林：林鶴助 (前掲)・米花：小山米花(前 掲)・桐園：今津鳳。周防三田尻 藩の儒者。書家。・景彦：津田景 彦(前掲)・土屋：土屋遊馬(前 掲)・上田：上田周助(前掲)・ 平山：田原藩士平山郷右衛門、主 一斎。幕府儒官。昌平塾教授。号愛 日楼。華山の儒学の師。			夜課

【日記記事表(2)】『華山先生遺録』記事

※『華山先生遺録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	書物・詩歌・ 字問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
			訪秋田藩五士 川、加納、小見 山次郎右衛門	小見山次郎右衛門：水戸藩儒。 号楓軒。郡奉行として勤農・殖 産に励んだ。			
	1月16日		訪吉田近火	吉田探信(前掲) (近火兄舜 い)	彩燈、夜課同上	午後直	
	1月17日				彩燈画夜同上	終日直	
	1月18日		年礼神谷公、山口 山、馬琴、蓋 忍、健喬、蓋 子、鶴田、高 生、鮫橋	神谷公：神谷左内(前掲)・馬 琴：滝沢馬琴(前掲)・山口 君：山口勝之助(前掲)・兼 子：金子金陵か。・筒井：藩臣 筒井政憲か。・鮫橋：菊池文海 (前掲)か。		夜直	傷寒、其上 宿病発動、 退出。一夜 不堪苦悶
	1月19日				彩燈画	終日直	
	1月20日						
	1月21日	病間見書・夜 見書			彩燈画		因痢魔万事
	1月22日	夜見書			病間製図		
	1月23日		拙豊呂頼之箱三 幅				
	1月24日		半水院会上堂	林儀助(前掲)			
	1月25日						
	1月26日		終日画武浦発会 展観画	喜多武清(前掲)			
	1月27日		金陵米	金子金陵(前掲)			
	1月28日				展観画著色	直・夜直、筆 記。	乗夜因病寒 徒然、偶言 一歩不速而 備行千里 途。
	1月29日		好山米、貸粉本 二枚。	池田又吉。近江宮川藩士。	展観画大成	午後直、録 筆。	
	1月30日					夜直	
	2月1日		武浦発会	喜多武清(前掲)		夜直	
	2月2日					直	夜侍行

【日記記事表(2)】『崋山先生謄録』記事

※『崋山先生謄録』(『渡辺崋山集 第一巻』所収)より

年	月日	事物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	職務	備考・その他
	2月3日						
	2月4日						
	2月5日						
	2月6日		桃香筵(会)、 上百山楼				
	2月7日						
	2月8日						韻大師河原
	2月9日						
	2月10日		星城来	星城(前掲)			
	2月11日						
	2月12日		上写山楼 上山口堂、借掛 物二幅 訪一斎、不在中 文澤来	谷文晁(前掲) 山口勝之助か。 佐藤一斎(前掲) 文晁門下の画家か。			
	2月13日						
	2月14日		武清鑑訂会	喜多武清(前掲)	(マコト) 畠山六祖、元信耕田 図、師宣姦、刑部卿 秀樹連磨、五山比丘 宗球寶永宸極四十 後、守景ホウツキ類 白、雪村観音、洞雲 寒山十得、卧信山 寒水、古探信寿星、常 信富士、徐秀秀夫葡萄 ※		※鑑定会で 見た諸品
	2月15日	一斎、梅斎、 半水来。(1)	(同左) 一斎、 梅斎、半水来。	一斎：佐藤一斎(前掲)・梅 斎：竹村梅斎(前掲)・半水： 林義助(前掲)			
	2月16日						
	2月17日						
	2月18日						
	2月19日						
	2月20日				此日製金コトヲ聞。 (2)		
	2月21日						
	2月22日						

【日記記事表(2)】『華山先生隠録』記事

※『華山先生隠録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	書物・詩歌・ 亭間等	人物	画作等	藩務	備考・その他
	2月23日					
	2月24日					
	2月25日					
	2月26日					
	2月27日					
	2月28日					
				先麗云、青緑ヲ描ク ニハ白 ^{ゲン} 、 ^{ゲン} 青、薄色ノロク青 (空字)ヲ雜テヌル ベシ。峯巒日ニ向ヒ タル処ヲ殘シテ、上 ヲシヤニ少々軋汁ヲ 加テ塗ルベシ。委不 可忘却。		
2月30日		読書	上至山樓	谷文晁 (前掲) ※右の「先麗」 (先生) も文晁のことか。		
		上縁陰茶寮、 画家ノ優秀ヲ シテ東西ニ七 シ版ヲ辟ケ 詩。(3) ※	(同左) 上縁陰 茶寮	山本縁陰 (前掲)	馬ノ一幀成	夜直 ※4月16日備 考参照。
3月1日						終日直
3月2日						
3月3日						
3月4日						
3月5日			甲乙会、文晁、 金陵、武清、半 金陵、昂達、太 水、岳、蘭庭、大 花、高島、豊呂 米ル。	甲乙会：絵事甲乙会 (前掲) ・文 晁：谷文晁 (前掲) ・金陵：金子 金陵 (前掲) ・武清：豊多武清 (前掲) ・半水：林儀助 (前 掲) ・昂達：小田昂達。名は大 寿。・大岳：浅尾大岳 (前掲) ・ 蘭庭：片岡蘭庭。備前の人。・文 花：菊池文海 (前掲) ・海蔵：竹 村海斎 (前掲) ・米花：小山米花 (前掲) ・高島：高島雄八	大岳：浅尾大岳 (前掲) ・文 晁：谷文晁門人 (前掲)。 出羽久保田藩主佐竹義厚。	終日席上諸君揮毫
			大岳、文永ヨリ 粉本師。 終日秋田公頼画 ヲ認			

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』『渡辺華山集 第一巻』所収より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	職務	備考・その 他
	3月6日						
	3月7日		光信再右之像出 来来ル (▽▽)	後藤光信 (前掲)。			
	3月8日				終日模粉本	直	
			訪神谷公	神谷左内 (前掲)			桃翁：俳諧 師天野桃隣 藤太夫、藤 堂藩士。大 白堂一世。 享保4年没。
	3月9日		桃翁忌にて墓石 至笠松久寺 (▽▽)	山口菜石。太白堂五世 (前掲)			
	3月10日				模写	終日直	
	3月11日						
	3月12日		米華筵会。	小山米花 (前掲)			
	3月13日						
	3月14日				古東京の門弟か、添 足と云ふ人あり。ある (図：添足の歌ある 梅臺の模写) 女筆に 似たり。		
	3月15日	夜偶成。(4)	京 (空字) 京都 御幸町松原下ル 富士田立徳様 福浦氏浜町の邸 に移りたる訪 ふ。				
			訪江西席上揮 毫。	華山の画友 (前掲)			
			追沼氏に邂逅 金陵を訪ふ時、 偶字を知ル。 (5)	金子金陵 (前掲)	成四睡図	直	
	3月16日 (曇)	直中句を得た り。(5)	高島頼画出来 (5)	高島雄入 (前掲)			
	3月17日		訪高島雄入、見 蓋湧模幅。	高島雄入 (前掲)			週知名 (6)

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
3月18日 (曇)			藍瑛 長江飛雪 図 紀蔭村岡县 蔵 収蔵				
			同 宿雨忽晴 落款米点山水 米菴蔵	市川米庵。江戸後期の書家。名 は三亥。寛斎の長男。加賀前田 侯に仕えた。	同 富香山 収蔵不 知、或云入讀岐藩		
			清湜 客図 (窓) 欲雪天図	鑄木洋庵。市川寛斎の次男、谷 文晁門下の画家。月琴の名手で 鑄木流を樹立した。			
			雲龍蔵 蒼山冷岫 同 蒼、傲雲林 内	同 藤豊前守；越後村上藩主内藤 信敬。五万九千石。			
			藤豊前守藩服部 同 写于長安客 板倉	板倉越中守；備中庭瀬藩主板倉 勝賢。二万石。海野蟬斎；名は 越中守内家老を遊			
			野蟬斎 同 傲荆閣阿筆 (空宇) 上毛	上野桐生新町の庄屋。絹織物 買次商を営む。			
			桐生佐羽清左衛 門蔵 同 傲王叙明 (空宇) 市川	市川米庵 (前掲)			
			三亥蔵				
3月19日 (晴)							
3月20日 (雨)	偶成(7)		訪万八、月窓会 庵の門下。〔又八は万八楼。阿 国柳橋の寶席 (前掲) 〕	全口世遠。江戸後期の画家。月 窓の門下。〔又八は万八楼。阿 国柳橋の寶席 (前掲) 〕	午前尾張屋屏風出来	松源寺御参詣 御供	
			隔途訪文星	含文星 (前掲) 。			
3月21日		全唐詩話寒山 拾得詩アリ、 趙子昂断縁 琴語又見えタ リ。	趙子昂 (元代の 書家、画家。湖 州の人。行、楷 の書を巧みで山 水面をよくし『琴 原』のことか。	訪貞順			
			竹村梅蔵手簡来 ル。	竹村梅斎 (前掲)			

【日記記事表(2)】華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	事物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	潜勢	備考・その他
	3月22日		梅齋詩会遇本多 茂市、此稻葉守 藤中鈴木伊兵 衛長屋内住居。	梅齋：竹村梅齋(前掲)。 ・本 多茂市：本多思斎。漢学者。佐 藤一斎塾での学友。・稻葉守： 山城淀藩主稻葉正弥。十万石。			
	3月23日				終夜撫画甚。不寐。	直	
	3月24日				同摸。		
	3月25日				夜摸明面差不寐。		
	3月26日				夜同摸數明。	直	
	3月27日		訪文題見林郊、 古木八哥中二八 哥白き有り。 桜田泉了長門屋 半六、長州画具 屋信元、夜上紀 薄南島旅館。 訪星城	谷文晁(前掲)			
	3月28日			星城(前掲)			
	3月29日		上回隠堂觀 雪涯林梅山水 吳遜藤花図 徐 吳秋江漁釣図 菊 南嶺馬図 菊 程添山水 費漢 映廬雁図 孫枝 山水※	多賀谷向陵。江戸後期の書家、 幕臣。			※諸画に對 する評省略
	4月1日 (雨)				葉間分染鹿間分染	御登城御供	
	4月2日		訪金陵	金子金陵(前掲)		直・御転任御 登城※	※田原藩主 に對する幕 府役職の変 更のこと か。
	4月3日						
	4月4日				関羽ヲ描	御返答二付御 登城御供畢来	

【日記記事表(2)】『華山先生遺録』記事

※『華山先生遺録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 字間等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	4月5日				関羽着色	御能※、御登城。自午時御供交代。	※江戸城内で将軍や諸大名の鑑賞に能が上演された。 ※寺社奉行の丹波世山藩主か。
	4月6日				関羽着色	御能初御拝見 御礼、青山※へ御直参御供。	
	4月7日		訪半次	林儀助(前掲) 高島：高島雄八(前掲)。 岸：岸順蔵か。和歌山藩士、漢学者。・太白：山口菜石(前掲)。	直		
	4月8日	偶成(8)	訪高島、岸、太白			直	
	4月10日						
	4月11日						
	4月12日						
	4月13日						
	4月14日						
	4月15日		武漣鑑訂会	喜多武清(前掲)		午後直	
		前夜偶得句。 (9)	洞斎鑑訂、屋代太良に邂逅。	洞斎：菅原洞斎。庫徳。字は正林、別号は阮唐。線池。江戸の人。狩野派に学んだ画家で、谷文屋の娘婿。鑑定家としても知られ、仙台侯に仕えた。・屋代太良：屋代弘賢。書家、歌人。幕府右筆、100石。神田明神下住。堀保巳一の門人で、『群書類従』の完成に努めた。森伊祥に書を学び、屋代流を興した。	…洞斎云、雪村ハ雪舟の弟子ニ非スト、猶可考。…[図](花鳥)…[図](騎馬人物) 移シ鞍ハ狩ノ時、旅行ニ用ユ。此頃ハ虎ノ革ノ如ク描ク。虎ノ革ノ太刀鞘ナドモ描クト云リ。※絵画・画家名は省略		

【日記記事表(2)】『華山先生謠録』記事

※『華山先生謠録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	事物・詩歌・ 学問等	人物	画作等	備考・その他
	4月16日		書画人、角力ノ 番付に事よせた る事、いみじく 人のもてはやす に(9)	平水：林義助(前掲)。・鵬 斎：亀田鵬斎。江戸後期の儒学 者、書家。下町の儒者として格 書を講じ、書画を売り詩文を 作った。・五山：菊池五山。字 は無絃。江戸後期の漢詩人。宋 詩風の詩人として知られ、画の 谷文晁、書の亀田鵬斎とともに、 芸苑の三絶と称された。・ 天民：大窪詩佛。江戸後期の漢 詩人。常陸国の人。神田お玉が の中心となり、書画もよくし た。字は天民。・緑陰：山本緑 陰(前掲)。・星池：秦星池 (前掲)。・晋斎：佐藤晋斎。家 刻家。通称栄吉殿。下谷三味線 堀泉橋通。・竹谷：依田竹谷 (前掲)。・錦城：大田錦城。 江戸後期の漢学者。清朝の考証 学をとり、わが国考証学の先 駆となった。吉田藩や加賀藩に 招かれ、儒学の教授をつとめ た。主業に『九録』など。	
	4月17日		訪景盛。	津田景彦(前掲)	

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	和名抄：『和名 類聚抄』。平安 中期に成立。我 国最初の百科辞 典的分類義和辞 書。源順著。・ 契沖：江戸前期 国学者。・続日 本紀：六国史の 第二。延暦16年 成立。・延喜 式：平安中期の 法令集。・古事 記：現存する日 本最古の歴史 書。和銅5年成 立。	人物		画作等	藩務	備考・その 他
	4月18日	十市の仮字返 臣云、(10)		(同左) 浜臣 云、	清水玄長。別号は泊々舎。村田 春海門下で、和歌をよくした。 江戸不忍池のほとりに住む。			
	4月10日	応成瀬藩人需 王逸書、袁表 書換。	王逸：清代の詩 人、文学者王士 禛。・袁表：明 代の詩人、学 者。	(同左) 成瀬藩 人	尾張犬山藩。藩主成瀬正寿。三 万五千石。	終日揮毫画帖		
	4月18日	※王逸・袁表 の詩(11)						※日付アズ
	4月19日							
	4月20日							
	4月21日							
	4月22日							
	4月23日	開成(12)						
	4月24日							

【日記記事表(2)】華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』『渡辺華山集 第一巻』所収より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	書務	備考・その他
	4月25日	王逸ノ書 (13)	(同左) 廖堂云 …・過意知レリ 処ニ…	洞斎：菅原洞斎 (前掲)			
	4月26日						
	4月27日						
	4月28日						
	4月29日						
	4月30日						
	5月1日						
	5月2日						
	5月3日						
	5月4日						
	5月5日						
	5月6日						
	5月7日						
	5月8日						
	5月9日						
	5月10日						
	5月11日						
	5月12日						
	5月13日	集古十種目録 (14)	古文書・古器 物・碑銘などを 撰字して編集し た図鑑。松平定 信編。寛政12年 刊。	訪新兵衛、搦 枕隣：山口萊石 (前掲) か。			

【日記記事表(2)】『華山先生叢録』記事

※『華山先生叢録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物	江戸後期の漢学者。佐藤一斎の 門下。	画作等	藩務	備考・その他
	5月14日		駿小路三谷道蔵 号煥齋。		終日揮毫	御供	
	5月15日	※菖草について・漢詩・茶 鐘・筒銘・句・ 什物など	来訪諸彦呈繆堂 (15)				
	5月16日	(15)	(同右)・茶鐘・筒 銘 (15) (同右) 訪太白 堂 (15)	佐藤一斎 (前掲) 山口萊石 (前掲)			
	5月17日						
	5月18日						
	5月19日						
	5月20日						
	5月21日						
	5月22日						
	5月23日						
	5月24日						
	5月25日						
	5月26日						
	5月27日						
	5月28日						
	5月29日	※榕斎漢詩な ど (16)	訪水野藩成田及 君鳳、文鳳、勤 斎、基原、吉田 探岳。 (16)	君鳳：奥山榕斎。江戸後期の漢 学者。秋田藩儒。本姓は糸井。 井上金峨に学ぶ。・文鳳：谷文 晁 (前掲)・勤斎：益田勤斎 (前 掲)・吉田探岳 (前掲)			
	5月29日		(同左)・君鳳の 大関土佐守・小泉丹蔭；黒羽藩 主との藩小泉丹 蔭といふ人	関増業。・小泉丹蔭；黒羽藩 主。号は檀山。文化11年に『檀 林斎石譜』を著す。			
	6月1日					御登城御供。	
	6月2日						
	6月3日						

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	職務	備考・その他
	6月4日						
	6月5日						
	6月6日	元喬 実渠館 (マツ)	服部南郭。別号 は美雲館。狹生 祖徳門の詩文面 の代表。				
	6月7日						
	6月8日						
	6月9日						
	6月10日						
	6月11日						
	6月12日						
	6月13日						
	6月14日						
	6月15日					終日直。	山王祭礼
	6月16日						
	6月17日		秋田公江御礼ニ 出ル。	久保田藩主佐竹義厚 (前掲)			
	6月18日		文親(手簡来)。)	谷文晁 (前掲)			
	6月19日						
	6月20日						
	6月21日						
	6月22日						
	6月23日						
	6月24日		岡部侯へ与文晁 席面ニ上堂、見 米氏禮。	岡部侯：和泉岸和田藩主岡部長 慎。・文晁：谷文晁 (前掲)			
	6月25日						
	6月26日						
	6月27日				妙源寺什物光信画幅 摸。		
	6月28日						
	6月29日		訪半水	林藤助 (前掲)			

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 字問等	人物	画作等	灌務	備考・その他
	6月30日					
	7月1日					
	7月2日		語文鳳、中村茂 五郎文鳳へ入門 同行。			
	7月3日		文鳳：谷文鳳 (前掲)	終日揮毫		
	7月4日			終日揮毫		
	7月5日					
	7月6日					
	7月8日					
	7月9日					
	7月10日					
	7月11日					
	7月12日					
	7月13日					
	7月14日					
	7月15日					
	7月16日					
	7月17日					
	7月18日					(徳川家康花 押)
	7月19日					
	7月20日					
	7月21日					
	7月22日					
	7月23日					
	7月24日					
	7月25日		訪問林			
	7月26日		岡田閑林。江戸後期の画家。幕 府の与力。花鳥画をよくした。			
	7月27日					
	7月28日		至洞斎展観見数 品	菅原洞斎 (前掲)		
	7月29日	終日免詩夜探 句、蝶至黄刻 半				
	8月1日	終日修鳳菜、 孔子を祀る儀 式。				
	8月2日	孔子講				

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	職務	備考・その他
	8月3日						
	8月4日		画山口頼画。此 武清を助ふ。此 堂に又平之画花 見之図を収む。 甚好。	山口勝之助 (前掲)			
	8月5日		訪文一臥病 英龜、田中 田来儀、半日の 閑をやぶる。 留守中星城来 り、唐紙を授 ふ。	谷文一(前掲) 英龜：加藤玄龜 (前掲)・吉 田：吉田探信 (前掲)	至増上寺見什物(省 略)		
	8月6日			星城 (前掲)			
	8月7日						
	8月8日						
	8月9日						
	8月10日						
	8月11日		見永井修理公什 物	旗本永井修理太夫久道。千石。			
	8月12日						
	8月13日		武清展観	喜多武清 (前掲)			
	8月14日						
	8月15日						
	8月16日						
	8月17日		太白堂、嵐龜、 夜中窓前虫を聞 く。	太白堂：山口萊石 (前掲)			
	8月18日						
	8月19日		静養庵甲乙会出 席。	絵事甲乙会 (前掲)			
	8月20日						
	8月21日						
	8月22日						
	8月23日						
	8月24日						
	8月25日		上山口君留別会 様。	山口勝之助 (前掲)			
	8月26日		星盛来り、廿八 日可助事。	星城 (前掲)			

【日記事表(2)】華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	8月27日		松野半蔵明朝可 訪事。				
	8月28日		訪星城。	星城 (前掲)			※ここより 下冊
	8月29日						※文化13年 閏八月。
	晦日						
	閏月1日						
	閏月2日						
	閏月3日						
	閏月4日						
	閏月5日	半水云、…予 未柳進外伝ヲ 不見 (17)	訪金陵	金子金陵 (前掲)			
	閏月6日		訪松野半蔵并半 水	半水：林徳助(前掲)			
	閏月7日						
	閏月8日						
	閏月9日						
	閏月10日						
	閏月11日						
	閏月12日						
	閏月13日						
	閏月14日						
	閏月15日						
	閏月16日						
	閏月17日		訪金陵会 江西云(18)	金子金陵 (前掲) 江西 (前掲)			
	閏月18日		訪大岳	浅尾大岳 (前掲)	見永徳猫、兆殿可觀 吾、羅漢二、楊柳大 士、徐枋山水、楊拙宗 初平の撰本文信美秘 戲図、古法眼図(栄山 模、宮川長春同上、 他二三巻。※		※評は省略

【日記記事表(2)】『華山先生謠録』記事

※『華山先生謠録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月 日	事物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	職務	備考・その他
	閏月19日				金翼法・銀翼法・胡 粉水飛法・石青、石 綠塗法(19)		終日因荷無 事。 同上。
	閏月20日						
	閏月21日	※漢詩 (20)	送山口君到四谷 新宿、又上山口 君堂 訪櫻堂会、 訪金陵	山口勝之助 (前掲)			
	閏月22日			金子金陵 (前掲)			忍田稲荷… (21)
	閏月23日	明和年間儒医 置林名録(22)	記武清、文二	武清：喜多武清(前掲)・谷文 一(前掲)	【図】(高尾立姿) 地 白水アイ、ウラ紅紅 葉□□、□□地白□ □形似。徳子吉野の 像なり。伊織利権右 衛門の追る処にて来 山の泥像と同物な り。但其光沢美麗ま さるよし。【図】(婦 女立姿像) 赤地スリ ハタ、口モヘヤ、ム ラサキ、アサギ、帯 スリハタ、鹿子浅黄 【図】(婦女坐像) 和 州、地白、浅黄鹿 子、帯藍		
	閏月26日						
	閏月27日						
	閏月28日						
	閏月29日	・・・ならび の風の法師ハ もふされた り・・・(23)					
	9月1日	吉田兼好。『徒 然草』188・189 段か。					
	9月2日	※抜粋					

【日記記事表(2)】『華山先生叢録』記事

※『華山先生叢録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	9月3日						
	9月4日						
	9月5日						
	9月6日		牛天神下水井戸 橋田大椿山 小笠原近江守様 内月岡亘景山 堀田豊則守様内 池田又吉好山 浅野(草) 堀田 原御使士町 阿 部集太良畫林	橋田大椿山：椿椿山。江戸後期の南画家。幕臣、槍組同心。絵ははじめ金子金陵に学んだが、のち華山に師事。彩色豊かな花鳥画を得意とする。・小笠原近江守様：小笠原貞胤。豊前小倉新田藩主。若年寄。・月岡亘景山：華山の画友か。・堀田豊前守様：近江宮川藩主。・池田又吉好山：池田好山(前掲)・阿部集太良畫林：阿部貫通。江戸後期の画家。養拙とも称する。			
	9月7日		六本木松清太兵衛方二趙仲穆画巻参り居るとて、人の申越したるによりて参りて一覽せしに、贋作疑なきものなり。其跋二人、一人の跋は忘れたり。		【図】(山水画) 白青存、勢山楼雪図華山持□		
	9月8日				世謂趙仲穆之不及松雪。獨大令之不及石軍。誠確論也。若此十冊精細高雅全法、宋入、即使松雪為之。亦不過是後之鑒者、必以即為知言與、實書□□		

【日記記事表(2)】華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物	画作等	播務	備考・その他
9月9日		八蔵君御前にて題字得て(2句)※俳句	泉岳寺什物、聖徳大師勝腰(ハヤ)燈を置く図一幅。○熾士肖像一幅。釈迦(ハヤ)八相図巨幅あるよし、文晁が一瞥せしとぞ。太岳来りて申しき。	文晁：谷文晁(前掲)。・大岳：浅尾大岳(前掲)。		重陽
			(同右) 八蔵君	13代田原藩主三宅康明の幼名。		○色々の事思ひ出して も忘れ侍 可、諸国什 物記は別本 に仕置た き。
9月10日			太岳へ清人水湖(辭)伝、蜀道雪後図、三聖図一枚、山水辺景照一枚、人物一枚貸遣ス。	浅尾大岳(前掲)		
9月11日			椿山牧溪二、寒山十得、梅津長者遣ス。萱生氏より申けるハ(25)	椿椿山(前掲)	[図](龍)	
9月12日				田原藩医萱生玄順。		
9月13日		又十三夜を人のもとめけるに…双の岡も…(26) ※俳句	双の岡：『徒然草』の著者吉田兼好の住居あたり。	華山の弟熊次郎。文化11年2月出家願いを済ませ、芝増上寺建電和尚の弟子となる。同年4月上野国館林の普導寺に移り、定寛上人のもとで剃髪し、定意と名乗った。この日は同僚との不和で妻家に戻った弟に意見して板橋まで見送ったものと推定される。		
9月14日			武遣展覧	喜多武清(前掲)		
9月15日						

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物	画作等	藩務	備考・その他
	9月16日					
	9月17日					
	9月18日		三河島名主源次 郎筆を善製と す。	武蔵国豊島郡三河島村の名主 か。		
	9月19日		与文晁主地 (子) 金輪寺に	谷文晁 (前掲) 会。		
	9月20日					
	9月21日					
	9月22日	予が描たる扇 を出して歎し きりに聲を かゝよりて… (27)※歌・詩 一事に思ひ たゞん八ハ… (28)				
	9月23日	四九孟子、五 十詩経。(28)	『徒然草』188・ 189 (59) 段の影 響か。※ 四と九の日には 『孟子』、五と 十の日には『詩 経』を読むこ と。	来三日高島雄八 招く事。 高島雄八 (前掲)		【図】(豊千禪師) ※9月1日条 参照
	9月24日		椿年、前 (藏) 天王町太西行之 助。	大西行之助。画家、幕臣。椿年 は号、圭斎の子。初め渡辺玄 対、のち谷文晁に師事し、山 水・花鳥を得意とした。		
	9月25日					土佐光臣が百鬼夜行 絵巻物八景野ノ真珠 庵什物也けるを、さ る人移被申たるを見 侍るに、かの狂画苑 に出たる如の図八景 の模様大違へり。又 元本の筆意の名も異 なり。
	9月26日					
	9月27日		吉田来儀	吉田探信 (前掲)		雪江画麿之事

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	9月28日				藤雪江八郎ヲ善する 人か、五十年斗先ノ 人なりとぞ。		
	9月29日	夜孟子。	上愛日楼	佐藤一斎 (前掲)			古筆を持って 来たりて醫 を乞ふ人あ り。
	10月1日		白竹村書簡来	白竹村梅斎 (前掲)			
	10月2日		高【島】雄八来 駕	高島雄八 (前掲)	方信画【印】。〔篆 書〕(九皇鳴鶴) 〔款記〕乾隆戊午中 秋、苗璵沈陰写於吳 趨之世翠楼 【印】【印】		
	10月3日						
	10月4日		訪文星、米菴、 樗忠太	文星：谷文星 (前掲)・米菴： 市川米庵 (前掲)・樗忠太：樗 樗山 (前掲)			
	10月5日	こよい菰穂難 識一言集とい えるを見付け るに… (29)※ 抜粋	楊甫之梅、祖仙 燈座、雪村燭、 呂記花鳥、林良 鷹、小笠 (原) 近江守殿収蔵。	小笠原貞温 (前掲)	○真写二枚出来		去二日観世 御進能二度 目の能あり ける夜… (29)
	10月6日		樗山、呉山、好 山来	樗山：樗樗山 (前掲)・呉山： 月岡呉山 (前掲)・好山：池田 又吉 (前掲)			
	10月7日		鈴木良庵来リ、 了庵住居四ツ谷 竹町。		守景ハ赤柄組とて男 立をせしよし、ある 人被申候。		
	10月9日						
	10月10日						
	10月11日						
	10月12日						

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他 肥前国辺に 産する処… (30)
	10月13日						
	10月14日						
	10月15日						
	10月16日						
	10月17日						
	10月18日						
	10月19日						雲砂ハ… (31)
	10月20日		上田老被申候は …(32)	田原藩士上田順右衛門			
	10月21日						
	10月22日						
	10月23日						
	10月24日						
	10月25日						
	10月26日						
	10月27日						
	10月28日						
	10月29日						
	11月1日		文化丙子十一月 一日賀莖石先 生、三老大人、 俗所禪入有卦、 華山	山口萊石 (前掲)	七ふ蝙蝠鹿福寿草 (ツクバノ字)。 【図】(鹿、蝙蝠、 福寿草)		
	11月2日						
	11月3日						
	11月4日						
	11月5日						
	11月6日						
	11月7日						
	11月8日						
	11月9日						
	11月10日						

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』『渡辺華山集 第一巻』所収より

年	月日	書物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	藩務	備考・その他
	11月11日	(33) ※俳句	山口公頼頼 [図] (仙人) 千 皆文丙子冬日写 于萬松堂東窓 下、華山 島雄八 [図] (山水)	山口直温 (前掲)			
	11月12日		…文藝君ハ父君 の十あまり七と せの忘のぞみて … (33)	高島雄八 (前掲)			風邪引籠。
	11月13日						
	11月14日						
	11月15日		[図] (不動) 半 水頼	林儀助 (前掲)			
11月16日			岡部庫太郎来 儀、南嶺芦雁ノ 図、羅密探幽虎 遁申候。虎を見たり きに虎、後狼な ど追ひ出たる中 に、かたはらな る流れに一虎水 をのミたる其濁 たり。さま、追れ て息のたえんとな せりと語り被申 たり。				
11月17日			半水を助ふ。 参院収会	林儀助 (前掲) 金子金陵 (前掲)			

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 季問等	人物		画作等	藩務	備考・その他	
	11月18日		金次郎へ忠良帰 納長、名乗遣 入。				備考・その他 ※隔納：半 切によつて 漢字の音を 出すこと。 命名に用い る。	
	11月19日		【図】(花鳥) 香 佐衛門頼、華山 【図】(山水) 同 頼、華山		【図】(花鳥) 華山			
	11月20日							
	11月21日							
	11月22日		寄写山楼、米花 頼之画二頼、文 是へ頼。 甲乙会、神仙之 類親門聖賢、故 事人物類、唐紙 一枚。下谷三味 線堀三筋町中ノ 町北馬毛にて興 行。 【図】(鹿) 尾五、 郎、一鹿悲秋、 丙子冬日、華山 【図】(人物・ 馬) 中沢、華山 (前略) …と題 谷先生いへいけ る。(34)	寄写山楼、文晁：谷文晁 (前掲) ・米花：小山米花 (前掲) 甲乙会：絵事甲乙会 (前掲)・ 北馬：有坂五郎八。号は蹄斎。 北斎の門人で、滝沢馬琴や高井 蘭山などの小説の挿絵を描き、 画名をあげた。特に彩色の肉筆 美人を得意とした。谷文晁の手 伝いもしたという。				
	11月25日 ※						※日付マズ	
	11月23日	※六玉川の歌 (34)			【図】(六玉川図、三 図) 一蝶の風たい文庫に 入置申候。		阿波の鳴門 ノ浜にて… (34) 長州二産ス ル処…(34)	
	11月24日		六玉川菊字頼ミ 竹谷へ置入。 【図】(芦雁・ 鴨) 菊字落筆	竹谷：依田竹谷 (前掲)				
	11月25日							
	11月26日							

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『蓬辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	事物・詩歌・ 学問等	人物		画作等	潜務	備考・その他
	11月27日						
	11月28日		武清会	喜多武清 (前掲)			
	11月29日						
	12月1日						
	12月2日						
	12月3日						
	12月4日		【図】(花鳥) 神谷公 〔図〕(山水) 神谷公 神谷公収会、上臺。	神谷左内 (前掲) 神谷左内 (前掲)			
	12月5日						
	12月6日		堂終会、展観来客。江西、山水、椿山、当屋正、屋五郎、同連人、英亀、白垂、担田、豊昌。	・江西：江西 (前掲) ・半水：林儀助 (前掲) ・椿山：椿山 (前掲) ・素什：素十 (前掲) ・英亀：加藤玄亀 (前掲) ・白甫：田原藩江戸詰藩士鈴木喜六の俳号。鈴木修賢。・周助：上田周助 (前掲) ・小寺：田原藩士小寺大八郎・和田：田原藩士和田十郎兵衛	画書幅来。○広沢行書○土佐法眼常昭公御桜ノ画一条兼熙公御たぐひなき色とぞ思ふ筆を歴てかいつねならぬさくら一木は ○崇貞山水一軸○探僧筆中富士、左清見、右三保、宗慶三社ノ託○頼暉蝦蟇○担仙鹿○大雅堂山水○古画猿猴一軸○荒一蟻中松力ザリニ官女、左琵琶二菊、右生二梅○安南国書錦○休甫美人○雪舟風乗馬達磨○横物芸阿弥山幅○白甫持参三幅○蕭白一軸○※		※印、持参者等省略。
	12月7日						

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『渡辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	事物・詩歌・学問等	人物	画作等	播磨	備考・その他
	12月15日		新氏衛来り。	【図】(豊干) 華山		他 赤坂寺町泉 福寺二神谷 伝信ノ墓あり。
			【図】(山水) 文化丙子、写于 萬絵堂、華山。 松平与次右衛門 様落筆。 武道方にて松塙 の撫じたる等額 の屏風一雙并曾 我直庵鷹一羽を 見る	松平与次右衛門様：旗本1500 石。中興御番衆。木挽町築地 住。		
	12月16日			喜多武清 (前掲)		
			洞斎展観	菅原洞斎 (前掲)		
		曳尾、我ごろ も、一、遊龍 種談、注世 世松考を授え。	(同右) 曳尾	加藤玄亀 (前掲)	摸一蝶	
	12月17日					
		ヨンスト ス、八十一 枚。				
	12月18日	※月の蝶・句 (36)	月の蝶：月につ いての名句や季 語などを集めた 本か。	白宙が需に応 ず。(36)	鈴木喜六 (前掲)	
	12月19日					
	12月20日					【図】(水禽) 華山、 已上頼み。
	12月21日					

【日記記事表(2)】『華山先生謄録』記事

※『華山先生謄録』(『遠辺華山集 第一巻』所収)より

年	月日	書物・詩歌・ 孝問亭	人物		画作等	藩務	備考・その他
	12月22日		米莖藏福鹿之画 幅落款。 (同右) 清兵衛 (37)	市川米庵 (前掲) 田原藩士村松清兵衛か。	【図】(楊舟莖鹿) 楊 舟、金果箋神書。数 皆、□		他 江本一夢と 被申ける人 …(37)
	12月23日	※漢詩(38)	訪登日蔭。	左藤一斎 (前掲)			較橋樑の 母事。(※河 方村彦左衛門 の一周忌の ことか)
	12月24日						
	12月25日						
	12月26日						
	12月27日						
	12月28日						

〔「華山先生謾錄」中引用・抜粹・聞書き記事〕

(1) 二月十五日

一斎、梅齋、半水来。

歲寒二友詩

歲晏無所有 何由慰我心 寒葩併霜寒 独幸照荒林
黃以符其德 丹以表其忱 豈無款門客 讓君默契深 梅齋

是非吟

人在醒爽日不殊 醉皆見利眼花乱

臨節腰脚痿能通 此閑者可与議是非

(2) 二月十九日

此日製金コトヲ聞。金箔五十枚ホド大皿にモミ入レ、上より
手に水ヲ付ハジキ入レテ箔ノ飛ヲサへ、漸ク粉トシテ二カ
ハ常ヨリハコク煮テ、蜆貝二五盃ホド入レ、手ノ指力掌ニテ
スリ、火ニカケテハ摺コナシク、大概ノ処ニテ水ヲハリ火
ニカケ、アクノ出ルヲ見テヲロシ、翌日其水ヲ思ヒ切テコボ
スコレハソロクコボセバ金
ス出テアサ又散 急ヒス
通火ニカケテアク見タル時、又急ニコボシテ浮タル細力ナル
金ト荒キ金ト二皿二分カ。細ナル方金ノ淀ムヲ見、又元ノ
如暫ク置テコボス。則コレヲ用ユ。

(3) 二月三十日

帰途上緑陰茶寮、画家ノ優劣ヲ分テ東西ニセシ版ヲ碎ク詩。
淳化年鑄犁棗板 星池楼上秘藏深
一声霹靂碎殘尽、強寸一鋌不禁縫

(4) 三月十五日

夜偶成。

暮音に声のまじるや雀の子
一すじの道が出来ればたんぽかな

(5) 三月十六日

金陵を訪ふ時、偶字を知ル。
暹羅鷄 鮪魚 皂尻 紫鵲鴿
直中句を得たり。

村雲のかげり頼みか啼蛙
啼れては蛙にころぶ垣穂かな

(6) 三月十七日

偶知名。

水楊イノコロ、筆頭土筆、
芋梗、連毛草、葢菜、錦荔枝、蕓薹、
蒲公英、碎米薺、
壺盧、夕貝、罌子、

蚕豆花、敗醬草、酸漿草、旋花、射干、橐蘂、
 薊、豆、燕麥、紫傘、萍蓬草、白英、雅蒜、
 水仙花

(7) 三月廿日

歸途訪文晁、偶成。

古池の月夜もらえよ白椿
 艸山の朧の雲が落さふな
 竹葉のかげをくほどや白椿
 宵雨のくるゝや檜のおぼろかげ

(8) 四月八日

訪高島、岸、太白偶成。

古池の月夜に咲かしる椿
 ほとゝぎす太刀帯こゝろとり替る
 郭公小さなものや角田川
 郭公鶴の身ハよせ二日月

灌仏狂哥

無漏路より有漏路に一寸出花ぞと

茶にうぶ湯めさる御仏

増賀のあかはだかは名利の境をしり、
 惟然かかり着はぬすミ
 の仇名をまぬがる。

あら涼しの拾ひとつや
 ほとゝぎす鳴越せひとり臥かぐむ
 郭公声長し身にかゝるとハ
 右 太白

(9) 四月十六日

書画人、角力ノ番付に事よせたる事、いミじく人のもてはや
 すになんありける。けふ半水記して贈ル。

経術文章占旧門 白頭爛醉隱寒村
 曲江浣裏春風滿 博得今年新狀元
 右因是示鵬齋詩

春風一夜動蓬門 偽登科録、噪僻村
 身是当年折肱驟 (噪) 愧人誤唱占三元

鵬齋

又

山沢腐儒不出門 春來耽酒醉寒村
 文章経学総拋擲 自許飲中新狀元

又

星池月落晋齋昏 竹谷風醒深鎮門
 詩佛堂前眠不就 無絃琴上緑陰翻

又

新山虎吼五山震 木折石顛厭幾人
 四子欲逃 (逃) 々不得 錦城々裏泣天民

右和鵬齋

【以下五行貼紙】

書画人角力ノ番付云々

文化乙亥冬月、五山、天民、緑陰、星池、晋齋、竹谷六子、同謀而作名士品題擬角力場。

中班姓名帖子刻而売之。至翌年丙子春月、都人始知之。莫不愕然群論聚謗喧伝一時。以鵬齋、文晁為狀頭、以天民為探花、諸人有詩如左。

前夜偶得句。

ほとゝぎすこゝろにくさよ独在ル

(10) 四月十八日

十市の仮字浜臣云、和名抄大和国郡名十市（炭）とあるを、十はとをの仮字なれば、十市もとをちの仮字なるべきを、とほととかくは仮字なるべきをとほととかくはいぶかしきよし。契仲法師をはじめうたがふ人おほし。これは続日本紀和銅六年五月の詔に畿内七道諸国郡郷名著好字と見え、又延喜式民部式に凡諸国郡内郡里等名並用二字、必取嘉名などありて、いにしえは文字二かゝはらず、正字借字かき来れるまゝに通用し、三字にもかきたるを、かく定ありての後は国郡郷名み

な二字に約メたる也。其例は上（カミシケル）口野（シホケル）、武藏（ムサシ）口、幡（ハリ）口磨（ハリ）中略、十市も本ハ三字なりけんを、中のほの字にあてし文字をはぶきしもの也。又十をとの仮字にのみ用ひしハ、神代紀十握（ツカサツル）劔又十（トコセ）年中（トナリ）筑前国鞍手郡の郷名に十市（トナリ）といふあるも同例にて、十口市の布にあつべき文字を一字はぶけるなり。此外和名抄郡郷の名あるひは三字四字あるひは一字なるも見えたる、これは別に委敷考をけるものあれば、こゝにはもらせり。

(11) 四月十八日

「王逸・袁褱の詩」※省略

(12) 四月二十三日

偶成。

ほとゝぎす太刀はくこゝろとりかはる

ほとゝぎす小さなものや角（隅）田川

(13) 四月二十五日

王逸ノ書寄賜園法帖二出ルト樛堂云、寄賜園法帖八清ノ秦鈞（シンギン）ガ集ナリ。洞齋知レル処ニ謝在杭州藏書印ノ有ル明画録ヲ所持イタセシト、此話ヲイタシケル日、樛堂云、在杭州書ヲ購ヒ一過スレバコレヲ売ル故ニ、日本へ来舶ノ人多持来レルナラン

ト申シ候。此証委シク東涯ノ盃簪録ニ載ルトゾ。

柴田玄英藏

古画人物ノ幅ニ落款。

会稽山陰 樂痴子

王謝郷人 樂痴子

皆黒画ナリ。又欽鍾礼方漁夫図 一幅

(14) 五月十三日

「集古十種目録、各部の値と冊数」※省略

(15) 五月十六日

薺シイナシ 蒙代葉、昔より塩干桔梗といえるハ甚は(わ)ろし、ヒ
キヲコシ艸といふあり、甚よし。たゞし毒消シニ用ゆ。

客来残醉醒 嬾不理頭髮 荒厨冷無烟 檠唯堆箏蕨

披画弁真贋 評書判工拙 把臂且留語 前林夜有月

来訪諸彦呈樛堂。

万物之靈藏倒 八卉三品之長

求諸千里非木 非草以水濟水

右茶鐘筒銘 一斎

訪太白堂、

对君虚舟に泣が如しといえるも

五月雨に打消さるゝか物がたり

崋山

太白和して、

跡なきをあはれとも見よ五月雲

梧は幽寂を解する如く、竹は喧嘩をさくる似たり。

時ホトトギス 鳥ふたり在とはしらざるや

東山稻荷へ太閤秀吉遣ス書、南都東大寺龍松院之什物。

其方支配之野干、秀吉召仕の女房に取付、為悩候、有何之遺

恨、成其讎候哉。此儀被聞届、可被申越候。是細なくして早

々可被引取候。猶於延引者、日本国中獵狩可申付候。委細之

儀者吉田神社口上に申含候。早々不宣。

三月十七日

稲荷大明神殿

参

秀吉(花押)
太閤

(16) 五月二十九日

標致元清絶 内抱不磷才 宜哉米博士 噢作丈人来 榕 斎

吉田話、吾が兄の庭をかこひたる垣根の竹倒に芽出たるとぞ。

大関土佐守どの藩小泉丹藏といふ人、諸国の石を所持せると

君鳳云へり。

(17) 閏八月五日

夕訪松野半藏并半水、々々云、王麓台画面白キ処少シト兼テ

思ヒ居タルニ、柳涯外伝ト云書ニ麓台ガコトヲ載タル条有リ、依テ解スルコトアリト。予未柳涯外伝ヲ不見。

(18) 閏八月一七日

訪金凌会、江西云、河豚フナの毒に当りたる時は砥トの粉第一よろしきよし。又烏賊イカの甲を削りてのミたる、いとよろしきとぞ。

(19) 閏八月十八日

金製法

先ツ素蓋ソウザンヘ膠水硯カンイ具ニ五六盃入レ、竹筴チヤクノ先ヘ蓋中ノ膠水ヲ付ケテ金箔ヲ別チ入ル可シ。但シ金箔重リテ飛ブ時ニ竹筴ニテ膠水ヲ動スベシ（度々）サスレバ箔コナレテ膠水ニ混ズ。此儘摩搗マツクセズ直ニ火ニ温スルコト暫時、膠水漸乾クヲ見テ火上ヲ去リ、温氣ヲ散ス（サシ）。然レ共温氣全ク去レバ摩スレ共乳セザル故ニ、温半ナルヲ機ミテ清水ヲ將テ滴チヨウ許シ、搗開スルコト五十回斗リ（應乾シバ）。再ビ清水ヲ用ヒ、硯上ニ及シ、一々洗淨シ火ヲ以テコレヲ暫ク温シ、而テ火ヲ去リ是ヲ淨清ノ室ニ置ク。金沈ミ水スメル時コレヲ行傾シ出ス。塵アルハ徐々水ヲ出ス。塵埃集テ硯中ヲ去ント欲ル時、急ニ傾倒スベシ。金出ルコトナシ。將タ水ヲ去リテ薄膠ヲ滴許シ、火ニ温シテ摩榻スルコト二百回許リ、又水ヲ施シ一々洗淨シ火ニ温シテコレヲサマシ、翌日開箔ヲリ始ル時ハ蓋ヲラデハク、清雜シ故、膠榻ニ番ナルモテハ翌日も又薄膠水ヲ滴シ摩スル

コト前条ノ如シ。如スルコト八九度ニシテ、金光ヲ放チ人ヲ射ルガ如キ時ヲ度ト為ス。

用法

火ニ温スル時ノ如ク水ヲ以テコレヲ解キ、火ニ温シ硯ノ傍金乾キタルヲ廻リヨリ用ユベシ。一回用タル時、又洗淨シテ火ニ温スル也。

銀製法

都蘆トロデ乳金ノ如クナレ共、烈火ヲ忌ム用法、金ノ如シ。

胡粉水飛法

胡粉ゴフン百目許リ乳鉢ノ中ニ入レテ乳細ス。而後膠着水、乳細漸々水ヲ施シ、屢々乳細屢施シ、水乳鉢ニ満タル時別蓋ニ移ス。鉢中存シタル物ヲ捨去ルベシ。又蓋ヨリ鉢ニ傾ケテ、蓋中存スルモノヲ捨去ル。如スルコト数十次ニシテ、存スル物ナキ時ヲ度トス。必粉光彩アリ、用法膠粉渾鎔コンヨウシテ搓セミテ餅子トシ、硯ノ一角ニ晒乾ス。用ル時滾水コンヨウヲ入レ、滴々ニ膠水ヲ数点ヲ施スル也。如芥子園伝法。

○エンジ、黄土ハ細搗スベシ。

○白口ク、白ゲン、白ニバン、白三バン、丹ハ用ルコト一日ニシテ休ム、日ヲ経テハ色失ス。

乳金法前日開シ処ハ未シ。

石青、石緑塗法

首ノ塗（図省略） 五分制（刷）毛ヲ以テ如此豎ニ塗ル也。

都テ薄ク乾塗スベシ。流シヌリハ膠覆テ本色ヲ失ス。

二番塗 (図省略)

三番塗 (図省略) ○大和絵ナンドニ疊ノ縁ヲ塗リタル時、

墨落リタル様ニ両面縁高クナル也。茲ハ墨書キヨリ首塗ヲ

二分許リ去リテ塗ル。二番ヲ一分出シ塗り、三番ヲ一分出シ

ゾベニヌル也。土佐ノ法則ナリトゾ。

粧化塗り (図省略)

○朱塗リ上タル時、礬水ヲ塗ス、色光如然トゾ。

(20) 閏八月二十一日

枝葉不塵姿、密疎態自奇、詩愁寒雨夜、写意淡煙時、

夢浄酔余枕、声飛石上棋、節高儔侶少、只有月相知

右竹。

(21) 閏八月二十二日

忍田稻荷、天智天皇の勳 (請) なりと、其時の木鉢伝記有。

(22) 閏八月二十三日

明和年間儒医評林名録

經学ノ部

宇佐美恵助 名恵、字子由、号瀾^シ水当時徠家での

老儒

名惟時、字君脩

名世鈞

名長章、字釋明、号白崑

名良、字子顯、号龜渚

名明、字子亮、号金峯

名公祺、字考甫、号東溪

名鉄、字大年、号東郭

名国、字子野

名孝徳、号太室

名之黄、号芳所

名金、字子蘭、号筑峯

名心清、字子纓、号江南

公款

名嘉英、字子尧

名孝先

詩文家

大内忠大夫 名承裕、字子綽、号熊耳。

鶴殿左膳 名孟一、字士寧

南宮弥六郎 名岳、字喬卿、号大湫

細井甚三郎 名徳民、字世馨、号平洲

井上文平 名純卿、号金峨

葛^{カン}陂^ハ(坡)山人

安達文仲

千葉茂右衛門

三浦左兵衛

伊東金

岡島忠藏

戸崎五郎太夫

入江与右衛門

鈴木嘉藏

中山清右衛門

横谷玄圃

积聞中

玩世道人

大内良助

下略

書家

三井孫四郎

伊藤善藏

沢田文治

松山源藏

中川長四郎

屋代与右衛門

姓高、名峻、字維嶽

名脩文仲其、字(空字)、号清河

名玄之

名衛興、字淳夫、号瓶山

名龜年、号藍田

名順、字忠甫

名哲、字子明、号淡園

名貞、字子実、号北海

名嘉章、字煥卿、澶州号也

名延中、字子和、号高陽

名友信、字文卿

名淨復、号芝庵

名実順覚道

名衡、字孟国熊耳義子

名親和、字孺卿、号龍湖

名藍道、字子行、号華岡

名鱗、字文龍、号東江

名敬、字伯義、号天姥

名壽、字大年、号醉晋

名師道、号龍岡

関源藏

平林莊五郎

竹岡主人

崑陵山人

柘植忠兵衛

河保寿

細井九暉

名知文、字天錫

〔図〕士寧鵜殿先生之墓、高輪長応寺中、鵜殿左膳、名孟一、
字士寧、詩文家

(23) 九月一日

行すゑのどかに思ひてさしあたりたることにのみつかはれ、
今日ハ此事をなさんと思へど、のがれぬ事の出来なんと兼而
のあらましみなたがひ行めり。必一事に思ひたゝん人ハ第一
に交をたちて人のあざけりをも顧ず、第二に他の事の破るゝ
共思ひ立ぬる方に心をやりて、日をおしむべきなりとぞ、な
らびの岡の法師ハもふされたり。されバ一升の水をはかれる
に、一合よりもれ一勺おろかなれバ、大なる損ありとぞ。一
日の間もかくごとく、一年のうちも又しかり。況や一事を思
ひたゝん人の一生□□□

(24) 九月九日

○八藏君御前にて題字得て

行秋やしるしなけれど木の高さ

踏おとのコタマ餅となりぬ紅葉やま

猿曳ササギの哥カも行ぬ夜の寒さ

○切てやる耳持てこそ鹿の声

猿曳のかざしにするか門菊

(25) 九月十二日

萱生氏より申けるハうなぎとりに参りたるに、うなぎよりハ一きハ大やかに細く長丰容にして、背に筋のある魚うなぎかきたるへらを囁たるをとり歸りて人に尋しに、すどうしと申けるいなりと、三河国わたりにはかく呼けるとぞ。又たいらぎという貝鳥に成んとせるを、四月頃ハまゝ見るなりと。

又去る人の方へ行たるに、蛤カキの身の鳥にならんとせるを煮たるを見侍りと語れき。甲カサくらげハ表すじありて兎に恰も似たるある、頃、人釣をたれたるに餌の鉤フサにあまれるを水に投たるを、かのくらげ浮て侍るかの餌沈たるを追ひ、廻りのひれよふの物に餌を包ミて食し侍る。かゝるものとても食タビセべらる理なきに非ざれども、ケ様のものいづこにや有る。

(26) 九月十三日

又十三夜を人のもとめけるに、

十三夜ミナト双フタの岡もかきくもれ

(27) 九月二十二日

予が描たる扇を出して妓しきりに賛をかゝりて、

富の出番、うりの賛

君のまこと富の出番と思えども千にひとりとめづる我かな
寓歎

頭上未蒙雪、(空字)、如何王右丞、剩得詩画名

(28) 九月二十三日

一事に思ひたゝん人ハ、其道のをきてゆるがせにすべからずとぞ。

四九孟子、五十詩経。

(29) 十月六日

去二日観世勸進能二度目の能ありける夜、正面棧敷より火出表面ハ秦山てし小庵の中焼失、四ツ半頃より起り子刻に消ス。死人三人と申ける。こよい落穂雑談一言集といえるを見侍りけるに、

謡ハ鹿苑院義満公に始る。観阿弥、世阿弥といふ者の作多し。或禅僧天台の僧作尚あり、元は秦川勝の製する所の謡

舞樂をやはらげたるものなり。今の金春は、秦川勝の苗裔也。又能東山どのより始る。寛正五年糺河原にて勸進能あり。義政公御覽也。これ此事のはじめなりけれ。

(30) 十月十三日

肥前国辺に産する処、あられ石豆石とて、漢名貴妃粉。

(31) 十月十九日

雲砂ハ漢名、又蛇砂又ヒル石。

(32) 十月二十日

上田老被申候は岩城の好間村と云ところの山に豆許(ゴシマ)の石様のものあり。これを拾ひて火に投ずれば直二寸余の蛇の如くなる。処々光さして児戯の弄にすなる、これ土人呼て蛇砂と申けるよし。

(33) 十一月十一日

食に野を連(ツグ)らて米負ふ時を忘れず。よハひ五十に及てさへむかしをしとふなるに、文鷲君ハ父君の十あまり七とせの忌のぞみて、袂もいかに氷るらん。さればとのミ御志の忍びがたしとて、此人々の言の葉を求て手向(タムケ)とはなし給ひぬとて、野鯨に申おこしたれば

きゝなれし身さへ寒しカゼ鳧の声

(34) 十一月二十三日

阿波の鳴門ノ浜二て十五間ノアハビを取りたるに、五間ノ鰻ウナギ二ツ付たるごとし、御届有之けるよし。

(中略)

土殷孽ドイゲン痢病ノ藥、大黒石、キヨウ石、牡丹石、禹余糧、コウバコ石、井泉石。土殷孽ハ三河辺他生スル、此物産処、必牡丹石、禹余糧、コウバコ石産するなり、と駒谷先生いへりける。

近江萩山々吹に陸奥千鳥むさし手作津卯に紀ノ毒

「図」(六玉川図、三図) 六玉川菊宇頼ミ竹谷へ遣ス。十二月四日持参。

長州二産スル処イシズミト云モノノ漢名木炭。

(35) 十二月八日

○氷。千鳥。冬木立。寒念仏。松の花。柳。駒鳥。春風。行年。於菊田俳諧興行兼題。

四

すはくゝと風邪に暮るゝか枯尾花

五

寒梅のなくなりもせず富士風オロシ

四

戸の外へ水もこぼさぬ時雨かな

(36) 十二月十八日

見覺し樹もなくならず夜半月、といふ句を月の蝶調るよし。
白甫が需に應ず。

(37) 十二月二十二日

江本一夢と被申ける八清兵衛が祖父にてありし人なりける。
この人力心の劍術の奥を極られて、いとをしき人なり。男
なる女なる子も侍てけるが、この三良なりけるもの人のよつ
ぎとなりしが、しか物をかすめ人の財をとりてかえさず。い
とくこゝろさあしかりしかバ、父にて侍ける一夢ぬし、
深この事をなげきてある時、浅草の観音へ参らんとこの人を
供にして、千手のわたりへ行て、自ら首はねて歸たり。この
日より癪いたみて生涯の病ひとはなり侍りたり、と常物がた
り也と。さればわづかの代をさりて人のこゝろざえいとおと
りたりけるが、今の世の人の心をもていとおしはかられぬ斗
に、おとりける也。この一夢のありし代のころは、御やしき
今の小石川なりける、吉原へ若き人々かよひける、やしきよ
り中拔草履をはき出れば、人あやしみてけるよりて、大給の
松の節穴に隠しおきてはかえて通ひたりとぞ。この代まで八

物ごと儉なる事如此し。

(38) 十二月二十三日

訪愛日樓。

碧葉素葩貼地披、霜威雪虛兩委蛇、

風姿須配梅花粥、此味人間知未知

顆凍花裏